

2018年アートクリティック活動の報告

アートクリティック

酒井正志、玉崎紀子、服部厚子

・ 2018年アートクリティック活動の報告

2018年文化科学研究所において開催されたアートクリティック例会において報告された観劇演目のリストを、ほぼ日付順に通し番号をつけて以下に記載する。ただし2017年12月に観劇したもので、2018年1月に報告された演目と、また2018年12月に観劇したもので、2019年1月に報告された演目も以下に掲載する。

1. コンサート『NHK ニューイヤーコンサート』愛知県芸術劇場・大ホール 1/3(水) 17:00～
(塹江)
2. 演劇『女の一生』(名演鑑賞会)日本特殊陶業市民会館ビレッジホール 1/23(木) 18:30～ (玉崎)
3. 映画『希望のかなた』(アキ・カウリスマキ監督・脚本)シネマテーク 2017年12/24(日) (服部)
4. NTL (National Theatre Live) 再 演劇『ハードプロブレム』(*Hard Problem*) 名演小劇場
1/13(土)～1/19(金) (服部 1/15)
5. MET ライブビューイング『皆殺しの天使』ミッドランドスクエアシネマ 1/27(土)～2/2(金)
10:00～ (伊藤 1/29、服部 1/30)
6. ミュージカル『Heads Up』大阪・新歌舞伎座 2/3(土) 12:00～ (服部)
7. オペラ『ナヴァラの娘・道化師』(藤原歌劇団)愛知県芸術劇場・大ホール 2/4(日) 14:00～
(服部・玉崎・塹江)

8. 芸どころ名古屋で学ぶ 第15回邦楽セミナー 日本舞踊『析・附け打ち・下座音楽』名古屋市芸術創造センター 2/6(火) 12:30~ (塹江)
9. 演劇『テロ Terro』(F.F.シーラッハ作・森新太郎演出) 名古屋市芸術創造センター 2/20(火) 18:30~ (服部)
10. ミュージカル『山三と阿国』(名古屋市文化振興事業団 2018年企画公演オリジナルミュージカル 奥山景布子原作・台本・作詞 大島ミチル作曲 永井寛孝上演台本・演出 西野淳指揮 徳山博士振付 セントラル愛知交響楽団) 名古屋市青少年文化センター・アートピアホール 2/23(金)~2/25(日) (塹江 2/23 18:30~、服部 2/24 11:00~、玉崎 2/24 16:00~)
11. 演劇『オセロ』SPAC 静岡芸術劇場 2/24(土) 18:00~・2/25(日) 14:00~ (伊藤 2/24、服部 2/25)
12. 映画『スリー・ビルボード』(*Three Billboards Outside Ebbing Missouri*) (マーティン・マクドナー監督・脚本・制作) ミッドランドスクエアシネマ 2/1(木) 16:25~ (伊藤)
13. NTL 演劇『エンジェルス・イン・アメリカ』(*Angels in America Part I: Millennium*) TOHO シネマズ名古屋ベイシティ 2/3(土)~2/9(金) 12:25~ (玉崎紫・竹本 2/5、伊藤 2/7 12:25~、服部 2/8)
14. NTL [再映] 演劇『欲望という名の電車』(*A Streetcar Named Desire*, dir. by Benedict Andrews) 名演小劇場 2/6(火) 13:00~ (玉崎)
15. NTL [再映] 演劇『人と超人』(*Man and Superman*) 名演小劇場 1/27(土)~2/2(金) (服部・玉崎 2/7 10:00~)
16. MET ライブビューイング『トスカ』ミッドランドスクエアシネマ 2/21(水) (塹江 2/21、酒井 2/24)
17. 映画『グレイテスト・ショーマン』(*The Greatest Showman*) (ビル・コンドン脚本・マイケル・グレーシー監督・Hugh Jackman 主演) MOVIX 三好 2/16(金)~ 9:50~ (玉崎・紫 2/20、服部 2/15 四日市)
18. 映画『今夜ロマンス劇場で』(武内英樹監督・宇山佳佑脚本・綾瀬はるか主演) MOVIX 三好 2/20(火) 12:50~ (玉崎・玉崎紫)

19. 映画『ローズの秘密の頁』(The Secret Scripture, ルーニー・マラー主演 dir. by Jim Sheridan
2016 公開) パルコセンチュリー 2/24(土) 14:15 ~ (服部)
20. 室内オペラ・喜歌劇『こうもり』(名古屋芸術大学教員・卒業生出演公演・澤脇達晴演出) 名古屋西文化小劇場 2/25(日) 15:00 ~ (塹江)
21. 演劇『ヒッキーソトニデテミターノ』(ハイバイ公演) 三重県文化会館小ホール 3/3(土) 14:00 ~ (服部)
22. オペラ『藤戸』(芸創オペラ 有吉佐和子原作・尾上和彦作曲 名古屋二期会・名古屋オペラ協会) 名古屋市芸術創造センター 3/3(土) 14:00 ~ (塹江・玉崎)
23. オペラ『ワルクューレ』(びわ湖プロデュースオペラ ワグナー作曲『ニーベルングの指輪』第1夜) 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール大ホール 3/4(日) 14:00 ~ (塹江)
24. シネマ歌舞伎 [再映]『人情噺文七元結』(山田洋次監督) ミッドランドスクエアシネマ
3/3(土) ~ 3/8(木) (玉崎 3/4 11:00 ~)
25. MET ライブビューイング『愛の妙薬』 ミッドランドスクエアシネマ 3/3(土) ~ 3/9(金)
(塹江 3/5、玉崎 3/7)
26. 演劇『岸 リトラル』(ワジディ・ムワウド作・上村聡史演出『アンサンディ』続編、翻訳題名『沿岸』) シアタートラム 3/10(土) 13:30 ~ (服部)
27. 演劇『父』(ストリンドベリ原作・小川ゆうな演出 雷ストレンジャーズ公演) サンモールスタジオ 3/10(土)
(服部 3/10 夜)
28. シネマ歌舞伎 [再映]『め組の喧嘩』(串田和美演出) ミッドランドスクエアシネマ
3/9(金) ~ 3/14(水) (玉崎 3/14 11:00 ~)
29. 演劇『オイディプス王』(河村正一脚本・演出 天野鎮雄・鈴木林蔵・鳥居美江主演) 愛知県芸術劇場・小ホール 3/15(木) 15:00 ~ (服部)
30. 演劇『もやしの唄』(小川未玲作・演出 テアトル・エコー公演、名演3月例会) 日本特殊陶業市民会館ビレッジホール 3/16(金) 13:30 ~ (玉崎)

31. オペラ 『セビリアの理髪師』 ドレスデン、ゼンパー歌劇場 3/18(日) 19:00～ (伊藤)
32. NTL 演劇 『エンジェルス・イン・アメリカ』 (*Angels in America Part II: Perestroika*) TOHO
シネマズ名古屋ベイシティ 3/16(金)～3/22(木) (服部 3/18、玉崎紫・竹本 3/20)
33. シネマ歌舞伎 [再映] 『四谷怪談』 (串田和美演出) ミッドランドスクエアシネマ
3/15(木)～3/19(月) (玉崎 3/18 11:00～)
34. シネマ歌舞伎 [再映] 『野田版研辰の討たれ』 (野田秀樹演出) ミッドランドスクエアシネマ
3/20(火)～3/24(土) (服部 3/20)
35. オペラ 『オテロ』 ウイーン、ウイーン国立歌劇場 3/22(木) 19:30～ (伊藤)
36. 演劇 『シャンハイムーン』 (井上ひさし作 栗山民也演出 野村萬斎主演) 穂の国とよはし芸術
劇場 PLAT 3/24(日) 12:00～ (服部)
37. 演劇 『寿歌』 (北村想作・宮城聡演出) 愛知県芸術劇場・小ホール 3/24(土)～3/26(月)
(服部 3/24 18:00、玉崎 3/26 14:00)
38. 映画 『北の桜守』 (滝田ヨウジロウ監督・吉永小百合主演 劇中劇ケラリーノ・サンドロヴィッ
チ演出・小野寺修二ステージング) 109 四日市東急 (服部 3/27)
39. シネマ歌舞伎 [再映] 『女殺油地獄』 ミッドランドスクエアシネマ 3/25(日)～3/30(金)
(玉崎 3/29)
40. MET ライブビューイング 『ラ・ボエーム』 ミッドランドスクエアシネマ 3/31(土)～4/6(金)
(塹江 4/6)
41. 演劇 『となりの芝生も』 (MONO 公演 土田英生作・演出) 四日市あさけプラザ 4/1(日) 14:00～
(服部)
42. オペラ 『コジ・ファン・トゥッテ』 (名古屋二期会研修会オペラ) 名古屋東文化小劇場
4/8(日) 14:00～ (玉崎)

43. 歌舞伎『柿茸落四月大歌舞伎』(11:00 寿曾我対面 白鷗・幸四郎襲名口上・籠釣瓶花街酔醒)
 (16:00 『梶原平三誉石切』 『勸進帳』 『廓文章』) 御園座 4/1(日)~25(水) 前 11:00~ 後 16:00~
 (塹江 4/12 11:00 昼夜、伊藤 4/9 16:00、酒井 4/15 11:00~・16:00~)
44. MET ライブビューイング『セミラーミデ』 ミッドランドスクエアシネマ 4/14(土)~4/20(金)
 (玉崎 4/17、塹江 4/14、服部 4/15)
45. 映画『ウィンストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』(Darkest Hour) TOHO シ
 ネマズ赤池プライムツリー (酒井 4/17)
46. 映画『シェイプ・オブ・ウォーター』(*The Shape of Water* ギレルモ・デル・トロ監督・原案・
 共同脚本 第74回ヴェネツィア国際映画祭金獅子賞受賞) イオンシネマ大高 (3/29)
47. 演劇『百年の秘密』(ナイロン 100 25周年記念舞台公演 ケラリーノ・サンドロヴィッチ作・
 演出) 下北沢・本多劇場 [3時間 25分] 4/14(日)~4/30 14:00~ (服部 4/14)
48. 演劇『ヘッダ・ガブラー』シアターコクーン 4/7(土)~4/30(月)・4/28(土) 13:00 後 16:00
 (伊藤 4/15 13:00、服部 4/28 13:00)
49. 映画『ザ・スクエア 思いやりの聖域』(カンヌ国際映画祭パルムドール賞 2017) 伏見ミリオン
 4/22(日) (服部)
50. 演劇『民衆の敵』(イブセン作・トーマス・オスターマイヤー演出ベルリンからドイツ語上演
 ふじのくに世界演劇祭 2018) SPAC 静岡芸術劇場 4/29(日) 19:00~4/30(月) 14:30~
 (服部 4/29 19:00)
51. 演劇『リチャード3世』(リモージュから フランス語上演 130分 ジャン・ランベール・ヴィ
 ルド他 (共同制作) ふじのくに世界演劇祭 2018) SPAC 静岡芸術劇場 舞台芸術公園 BOX シア
 ター 4/29(日) 13:00~4/30(月) 11:00~ (服部 4/29 13:00)
52. 演劇『*Macbeth*』(Rufus Norris 演出 Rory Kinnear 主演) National Theatre (London)
 5/4(日) 19:30- (酒井)
53. 演劇『*As You Like It*』(Emma Rice 演出) Shakespeare's Globe (London) 5/5(月) 19:30~
 (酒井)

54. 演劇『ヌマンシア』（セルバンテス作・田尻陽一訳・脚色 神宮寺啓構成・演出）劇団 クセック
愛知県芸術文化センター・小ホール 5/3(木)・5/4(金) 14:00～ (服部・玉崎 5/3)
55. 演劇『マハラバタ』SPAC 静岡芸術劇場 駿府城公園広場・特設会場 5/6(日) 18:50～ (伊藤)
56. MET ライブビューイング『コジ・ファン・トゥッテ』5/5(土)～5/11(金)
(服部・玉崎 5/6、塹江 5/10、伊藤 5/11)
57. バレエ『眠れる森の美女』（パーミンガム・ロイヤル・バレエ団 名古屋国際音楽祭）日本特殊陶
業市民会館フォレストホール 5/15(木) 19:30～ (塹江)
58. 演劇『大正の肖像画』（名古屋演劇鑑賞会・劇団民芸）日本特殊陶業市民会館ビレッジホール
5/16(水) 13:30～ (玉崎)
59. 演劇『ヘンリー 5 世』新国立劇場・中劇場 5/18(金)～5/20(日) (伊藤 5/18 18:30～、服部 5/19)
60. オペレッタ『メリー・ウイドウ～パリの恋人～』（塚本伸彦・日々野景主演）HITOMI ホール
5/19(土) 15:00～ (玉崎)
61. MET ライブビューイング『ルイザ・ミラー』5/19(土)～5/25(金) (塹江 5/20)
62. 映画『モリのある場所』（カンヌ国際映画祭パルムドール賞 2018）ミッドランドスクエア
(塹江 5/20)
63. ミュージカル『メリー・ポピンズ』（イギリス crew）梅田芸術劇場メインホール
5/21(月) 13:00～ (玉崎)
64. スーパー歌舞伎『ワンピース』（猿之助ほか）御園座 5/3(木)～5/27(日)
(塹江 5/10 16:30)
65. オペラ『オペラの魅力 vol.28』（エウロ・リリカ 岡本茂朗主演）しらかわホール
5/23(水) 18:30～ (塹江)

66. NTL 演劇 『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』 (*Rosencrantz & Guildenstern Are Dead*) TOHO シネマズ名古屋ベイシティ 5/25(金)~6/1(金)
(玉崎・服部 5/26 13:00~、伊藤 5/29 15:50~)
67. 演劇 『鏡の星』 (鹿目由紀作・小林七緒演出 劇団あおきりみかん) G/PIT 5/30(水) 14:00~
(服部)
68. 映画 『ファンタム・スレッド』 (*Phantom Thread* Daniel Day Lewis 主演 2018 年アカデミー賞受賞) 伏見ミリオン 5/31(木) 15:05~
(伊藤)
69. MET ライブビューイング 『サンドリヨン』 6/2(土)~6/8(金) (服部 6/2、玉崎 6/3、塹江 6/5)
70. 演劇 『ハングマン』 (*Hangmen* マーティン・マクドナー作 [Lawrence Olivier award 2016 Best Play]・小川絵梨子訳・長塚圭史演出) 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT 6/9(土)・10(日) 13:00~
(服部 6/9)
71. 演劇 『孺子の靴』 (ポール・クローデル作 渡辺守章訳脚本台本・演出) SPAC 静岡芸術劇場 6/9(土)~6/10(日) 11:00~20:00
(玉崎 6/9、服部 6/10)
72. シネマ歌舞伎 『東海道中膝栗毛 歌舞伎座捕物帖』 (染五郎・猿之助出演) [平成 29 年歌舞伎座] ミッドランドスクエアシネマ 6/9(土)~6/29(金)
(服部 6/13、伊藤 6/17)
73. ミュージカル 『1789 バスティーユの恋人たち』 (小池修一郎演出) 大阪・新歌舞伎座 6/2(土)~6/25(月)
(服部 6/16 12:00)
74. 映画 『犬が島』 (*Isle of Dogs* Wes Anderson 監督 ドイツ・アメリカ制作) 伏見ミリオン 6/20(水) 14:45~
(伊藤)
75. 映画 『焼肉ドラゴン』 (鄭義信監督・原作戯曲・脚本 2018 公開) 東員イオン 6/24(日) (服部)
76. オペラ 『トゥーランドット』 (イタリア・バーリ歌劇場・グレギーナ主演) 日本特殊陶業市民会館フォレストホール 6/29(金) 18:30~
(塹江)
77. オペラ 『不思議の国のアリス』 (稲葉地オペラ・木下牧子作曲・池山奈都子演出) 名古屋東文化小劇場 7/1(日) 11:00~
(塹江)

78. 映画『ワンダー 君は太陽』(Wonder 字幕版) ミッドランドスクエアシネマ 7/4(水) (服部)
79. NTL 演劇『アマデウス』(Amadeus P.シェーファー作) TOHO シネマズ名古屋ベイシティ
7/6(金)~7/12(木) (玉崎 7/8、服部・伊藤 7/7)
80. ミュージカル『幸せの雨傘』(名演例会 NLT・鶴山仁演出・賀来千香子主演) 日本特殊陶業市民
会館ビレッジホール 7/12(木) 13:30~ (玉崎)
81. 狂言『犬猫又狩騒動』(亀山郁夫作・たかべしげこ朗読) 名古屋外語大 K 館 508 教室
7/17(火) 16:40~ (塹江)
82. オペラ『魔弾の射手』(佐渡裕 produce オペラ) 兵庫芸術文化センター大ホール 7/21(土) 14:00~
(服部)
83. オペラ『トスカ』(新国立劇場開場 20 周年記念オペラ公演) 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール大ホー
ル 7/22(日) 14:00~ (塹江)
84. ダンス & 演劇 Noism 『Romeo & Juliets』 SPAC 静岡芸術劇場 7/22(日) (服部・伊藤)
85. 公開レッスン (沼尻竜典氏講義・実地指導) 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 8/1(水)~8/3(金)
(塹江)
86. 音楽劇『コーカサスの白墨の輪』(ブレヒト作・俳優館・なかとしお演出) 名古屋市千種文化小
劇場 8/2(木)~8/5(日) 14:00~ (玉崎 8/3、服部 8/4)
87. 演劇『Twelfth Night 十二夜』(Oxford 大学演劇協会来日公演) 京都造形芸術劇場・春秋座
8/11(土) 15:00~ (玉崎)
88. 演劇『La Voix Humaine』(『人間の声』コクトー作) パリ Theatre du Nord Ouest
8/14(火) 19:00~ (服部)
89. 講演『ムンクとイプセンの『幽霊』』愛知県図書館 8/24(金) 18:00~ (塹江)
90. 演劇『冬物語』(子供のための Shakespeare 山崎清介演出) 名古屋東文化小劇場 8/29(水)
13:30~ (服部・玉崎・塹江)

91. MET ライブビューイング・リバイバル上映『トスカ』 ミッドランドスクエアシネマ
9/1(土) 10:30~ (伊藤)
92. ミュージカル『コーラスライン』 (*A Chorus Line* Broadway 来日公演 Baayork Lee 演出・振
付・再構成) オリックス劇場 9/1(土) 13:00~ (玉崎紫)
93. 楽劇『ジークフリート』 (愛知祝祭管弦楽団) 御園座 9/2(日) 15:00~ (塹江・服部・玉崎)
94. MET ライブビューイング・リバイバル上映『ドン・カルロ』 ミッドランドスクエアシネマ
9/5(水) 10:30~ (玉崎)
95. 演劇『恋におちたシェイクスピア』 (Lee Hall 脚本・劇団四季) 京都劇場 9/8(土) 16:40~
(服部)
96. コンサート『オーデン・不安の時代 パーンスタイン生誕 100 周年記念』 名フィル第 460 回定期
演奏会 (piano 小曾根真・川瀬賢太郎指揮) 市民会館 9/8(土) 16:00~ (玉崎)
97. ミュージカル『ハミルトン』 (*Hamilton*) Kennedy Center : Opera House Washington DC,
USA 9/9(日) 13:30~ (伊藤)
98. コンサート『ブレヒト・詩と音楽の夕べ』 (愛知県立芸術大学レクチャーコンサート) ザ・コン
サートホール 9/11(火) 19:00~ (服部・塹江)
99. 演劇『ザ・チルドレン』 (*The Children* PARCO Produce L.カークウッド原作・Tony 賞作
品賞受賞作品 小田島雄志訳 栗山民也演出・高畑淳子・鶴見辰吾・若村麻由美出演) 世田谷パブ
リックシアター・大ホール 9/15(土) 13:00~ (服部)
100. 演劇『出口なし』 (サルトル作・上演台本小川絵梨子) 新国立劇場・小劇場 9/15(土) 19:00~
(服部)
101. オペラ『椿姫』 (ローマ歌劇場来日公演・ソフィア・コッポラ演出・ヴァレンティノ衣装) 東京
文化会館大ホール 9/16(日) (塹江)
102. オペラ『マノン・レスコー』 (ローマ歌劇場来日公演 キアラ・ムーティ演出・クリスティーネ・
オボライス主演) 神奈川県民ホール 9/17(月) (塹江)

103. 映画『哀愁』(Waterloo Bridge, 1940) 名古屋市名東文化小劇場 9/19(水) 10:30 ~ (塹江)
104. 演劇『かのような私 或いは斎藤平の一生』(文学座地域拠点契約事業) 八尾市プリズムホール小ホール 9/24(月) 14:00 ~ (服部)
105. 映画『マンマ・ミーア! ヒア・ウイー・ゴー』 109 シネマズ四日市 8/25(土) (服部)
106. ミュージカル『シティ・オブ・エンジェルズ』(City of Angels 1990年 Tony 賞受賞・日本語版初公演) 大阪・新歌舞伎座 9/28(金) 13:00 ~ (玉崎)
107. NTL 演劇『イエルマ』(Yerma ロルカ原作・Simon Stevens 翻案脚本・演出 Billy Piper 主演) TOHO シネマズ名古屋ベイシティ 9/28(金)~10/4(木) 12:20 ~
(服部・玉崎 9/30、伊藤 10/1)
108. 歌舞伎『第19回定例顔見世』夜の部演目：(女暫 連獅子 与話情浮名横櫛) 御園座
10/4(木) 16:00 ~ (塹江・伊藤)
109. 演劇『まさに世界の終わり』(ジャン＝リュック・ラガルズ作) 名古屋市芸術創造センター
10/4(木) 18:45 ~ (服部)
110. 人形浄瑠璃『文楽』名古屋市芸術創造センター 10/5(金) (昼の部 14:00 ~、夜の部 18:30 ~)
昼の部演目：義経千本桜 (椎の木の段・すしやの段)
夜の部演目：義経千本桜 (道行初音旅) 新版歌祭文 (野崎村の段) (塹江 (昼夜))
111. オペラ『魔笛』(NISSAY Opera 2018 沼尻竜典指揮 佐藤美晴演出 伊藤貴之、山本康寛、角田祐子、砂川涼子) 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 10/6(土) 15:00 ~ (塹江)
112. 演劇『授業』(イヨネスコ作・西悟志演出) SPAC 静岡芸術劇場 10/6(土) 14:00 ~ (服部)
113. オペラ『カルメン』(ブルガリア歌劇場公演)日本特殊陶業市民会館フォレストホール
10/7(日) 17:00 ~ (塹江)
114. 名フィル第461回定期演奏会： 部マーラー第8番『1000人の交響曲』中部フィル共演 第部ゲーテ『ファウスト』(小泉和祐指揮・並河寿美・大隈千佳子・福原寿美枝・望月哲也・宮本益光・久保和範等出演) 日本特殊陶業市民会館フォレストホール 10/12(金) 18:45 ~ (服部)

115. 演劇『ウリアしまたる王』(Shakespeare リア王より 安田雅弘演出 劇団山の手事情社公演)
東京芸術劇場シアターウエスト 10/20(日) 14:00～ (服部)
116. 野外劇『三文オペラ』(宮城聰総合芸術監督 ジョルジオ・バルベリオ・コルセッティ演出) 東
京芸術劇場西口 10/19(金) 19:00～、10/20(土) 18:00～ [共に雨天公演中止] (服部)
117. 映画『運命は踊る』(サムユエル・マオズ脚本・監督 第74回ヴェネチア国際映画祭審査員グ
ランプリ受賞 イスラエル・ドイツ・スイス・フランス合作) 伏見ミリオン座 10/19(金) 12:05～
(伊藤)
118. 演劇『ああ、それなのに、それなのに(注文の多い料理昇降機)』(別役実新作 真鍋卓嗣演出
名取事務所) 下北沢小劇場 B1 (北沢タウンホール内) 10/19(水) 14:00～ (服部)
119. 演劇『修道女たち』(ケラリーノ・サンドロヴィッチ作・演出) 本多劇場 10/20(土) 18:00～
(服部)
120. 演劇『誤解』(*The Misunderstanding* アルペール・カミュ作 稲葉賀恵演出) 新国立劇場・
小劇場 10/21(日) 13:00～ (服部)
121. オペラ『ランスへの旅』名古屋市芸術創造センター 10/28(日) 14:00～
(玉崎 10/27、塹江 10/28)
122. NTL ミュージカル『フォリーズ』(*Follies* Sondheim 作詞・作曲 Dominic Cooke 演出)
TOHO シネマズ名古屋ベイシティ 10/19(金)～10/25(木) 12:20～
(服部・玉崎 10/20、伊藤 10/24)
123. 映画『羊と鋼の森』(橋本光二郎監督 久石譲作曲編曲 辻井伸行ピアノ) 三越映画劇場
10/24(水) 13:20～ (塹江)
124. 演劇『シェイクス SHAKES』(IKKAN 脚本 田中精演出) 昭和文芸小劇場 10/26(金)
(服部)
125. コンサート『グレン・ミラー オーケストラ』日進市民会館 11/3(土) 17:30～ (玉崎)
126. 能 名古屋金春会『景清』『呂連』『小鍛冶』名古屋能楽堂 11/4(日) 14:00～ (塹江)

127. MET ライブビューイング『アイダ』 ミッドランドスクエアシネマ 11/2(金)~11/8(木) 10:00~
(塹江 11/8)
128. 映画『華氏 119』(マイケル・ムーア監督) ミッドランドスクエアシネマ 11/8(木) 16:10~
(伊藤 11/8 16:10~)、(塹江 11/11 14:25~)
129. オペラ『バステアンとバステエンヌ』(太田麻衣子演出) 愛知県芸術劇場・小ホール
11/16(金)・11/17(土) 14:00~ (塹江 11/16、玉崎 11/17)
130. 能『鷹姫』(イエイツ作『鷹の井戸』の横道万里雄による改作・大槻文蔵の会・大槻文蔵・大槻裕一・野村萬斎出演 野村萬斎演出) 大阪大槻能楽堂 11/17(土) 13:00~ (磯野)
131. 映画『ニューヨーク・ジャクソンハイツへようこそ』(*In Jackson Heights* Frederick Wiseman 監督 2015 documentary) 名古屋シネマテーク 11/17(土) 14:40~ (服部)
132. MET ライブビューイング『サムソンとデリラ』 ミッドランドスクエアシネマ
11/16(金)~11/22(木) 10:00~ (塹江 11/20)
133. 映画『雨の朝パリに死す』(*Babylon Revisited* 1954 公開 Scott Fitzgerald 原作 1945) 名東文化小劇場 11/21(水) 10:00~ (塹江)
134. 演劇『マンザナ、わが町』(井上ひさし作 鶴山仁演出 こまつ座公演) 日本特殊陶業市民会館
ビレッジホール 11/22(木) 13:30~ (玉崎)
135. 演劇『誰もいない国』(*No Man's Land* ピンター作・寺十吾演出) 新国立劇場・小劇場
11/23(木) 13:00~ (服部)
136. オペラ『ウリッセの帰還』(北とぴあ国際音楽祭 2018 寺神戸亮指揮・レボレアード管オリジナル楽器・小野寺修二演出 セミステージ形式・出演:エミリアーノ・ゴンザレス=トロ、マチルド・エティエンヌ、櫻田亮、波多野睦美、マイム・パフォーマンス出演) 北とぴあ 11/23(金) 18:15~
(服部)
137. 演劇『銀杯 *The Silver Tassie*』(ショーン・オケイシー作・アイルランド反戦演劇 森新太郎演出) 世田谷パブリックシアター 11/24(水) 13:00~ (服部)

138. オペラ『王子とこじき』(名古屋オペラ協会創立 35 周年記念公演・河出智之希曲、倉知竜也・池山奈都子演出 & 美術・愛知室内オーケストラ) 名古屋市芸術創造センター 11/24(土) 13:00 ~
(玉崎)
139. NTL 演劇『ヤング・マルクス』(*Young Marx* Nicholas Hytner 演出) TOHO シネマズ名古屋ベイシティ 11/23(金)~11/29(木) 12:20 ~
(服部 11/25、伊藤 11/26、玉崎 11/27)
140. バレエ映画『シンデレラ』(マシュー・ボーン振付) 名演小劇場 12/1(土) 12:40 ~
(伊藤 12/1 12:40 ~)
141. NTL 演劇『ジュリアス・シーザー』(*Julius Caesar* Nicholas Hytner 演出) TOHO シネマズ名古屋ベイシティ 11/30(金)~12/6(木) 14:50 ~
(服部 12/1、玉崎 12/4、伊藤 12/6)
142. バレエ『白鳥の湖』(キエフ・バレエ来日公演・原振付 M. プティパ/L. イワノフ/F. ロブホフ V. コフトゥーン振付演出) 日本特殊陶業市民会館フォレストホール 12/2(土) 15:00 ~ (塹江)
143. 演劇『紙屋町さくらホテル』(井上ひさし作・柘倫司演出・劇団名芸公演) 名古屋市天白文化小劇場 12/2(日) 13:00 ~ (玉崎)
144. 演劇『民衆の敵』(イブセン作・ジョナサン・マンビイ演出 堤真一主演) Bunkamura シアターコクーン劇場 12/5(水) 13:30 ~ (伊藤)
145. コンサート『カトリオーナ&クリス：神秘的ケルティック・ハーブとフィドル』宗次ホール 12/5(水) 14:00 ~ (磯野)
146. 演劇『真夜中の弥次さん・喜多さん』(天野天街演出) 四日市あさけプラザ 12/15(土) 14:00 ~ (服部)
147. MET ライブビューイング『西部の娘』ミッドランドスクエアシネマ 12/7(金)~12/13(木) 10:00 ~
(玉崎 12/11、塹江 12/13)
148. 演劇『サイパンの約束』(坂手洋二作・演出 燐光群公演 渡辺美佐子主演) 愛知県芸術劇場・小ホール 12/20(木)~12/21(金) (玉崎 12/21 13:30 ~)

．観劇短評選

(1) 6. ミュージカル『Heads Up』

2015年に初演されたKAAT神奈川芸術劇場プロデュースミュージカル『HEADS UP!』（原案・作詞・演出：ラサール石井）は、架空のブロードウェイミュージカル『ドルガンチェの馬』の仕込みから閉幕後のバラシまでを描いた、バックステージものである。第23回読売演劇大賞 演出家部門優秀賞を受賞したこの作品の再演を大阪の新歌舞伎座で観た。

舞台制作で実績のあるスタッフ（脚本：倉持裕、作曲・音楽監督：玉麻尚一、振付：川崎悦子）による舞台は、『アナと雪の女王』『ドレッサー』『ラマンチャの男』『キスマーケイト』等々先行作品へのオマージュやパロディ、さらに演劇業界のブラックあるある話など満載である。平成に生まれたこのミュージカルは演劇の底辺を支える裏方や下積みの人々すべてに平等にライトを当てた群像劇であり、ヒーロー・ヒロインが不在である一方で、それぞれの役は丁寧に描かれることで存在感を持ち、観客の共感を誘った。演劇への愛とミュージカルへのノスタルジアに溢れる作品であった。

劇中劇『ドルガンチェの馬』は1000回の公演を達成し、終了したはずの人気演目であったが、主演俳優の希望で1001回目を北関東の公共劇場で上演することになった。ストーリーテラーは劇場付きの雑用係役熊川の中川晃教で「ぼくらの劇場に、あのミュージカルが30年ぶりにやってくる！」とそのわくわく感を歌う。その他、「チケットを売ったってことは、約束したってことなんですよ!」「クギー本残してはいけない」と心に染み入る歌の数々。ドタバタ劇中劇の老いぼれた主役と寄せ集めの装置。口ずさみたくなるお持ち帰りソングやショーアップされた華やかなシーン。これらのミュージカルを構成する要素と若者たちの成長や愛の成就のお決まりの物語などが、スタッフと役者と観客が共有した時間と空間で形を成してくる。創っては壊す虚構世界にあって情熱と愛が劇場に伝わることを可視化したのが、最終場面で客席を舞台上の鏡に映し出したことである。亡霊という正体を明らかにした熊川が客席から語り、第4の壁は取り除かれる。奇跡は劇場で起こるのである。

「Heads UP」には裏方のかけ声「頭上注意」と「顔を上げろ」の二重のメッセージが含まれる。ベタなプロットと演出は、一昔前のブロードウェイミュージカルを想起させるものであったが、地方の公共劇場を舞台に演劇にかかわるすべての人を描いている点でも、芝居がどう上演されていくのかわかるうえでも一見の価値がある平成のミュージカルであった。 (服部 記)

(2) 26. 鎮魂の演劇『岸 リトラル』、104. 『かのような私 或いは斉藤平の一生』

世田谷パブリック劇場企画制作のワジディ・ムワド原作、上村聡史演出の『岸 リトラル』をシアタートラムで観た。同劇場で2014年に制作・上演された同じくムワド原作、上村聡史演出の『炎 アサンディ』は亡き母の埋葬を契機に自らのルーツを遡行する神話的壮大さを持った作品であったが、今作は背負った父の死体と対話しながらその荒ぶる魂を救済するため祖国を彷徨うロードムービー的な作品であった。

生前父に会うことのなかった息子ウィルフリード（亀田佳明）は名も知らない相手との情事の最中

に父（岡本健一）の死を知らされる。彼は引き取った父の遺体を遠く離れた彼の故郷に葬ろうと死体を背負い埋葬場所探しの奇妙な旅を始める。しかし、紛争地である故郷には死者が多すぎるため、さらに故郷喪失者であるため遺体を埋める許可が得られない。旅の途上で出会った歌う女、自分の父を誤って殺してしまった青年、滅ぼされた町のかつての住民の痕跡を留める電話帳を持ち歩く女などが旅に加わり、みんなで死体の埋葬地を求めて海を目指す。

父の遺品の鞆の中にあった出されなかった息子宛の手紙。腐っていく死者との対話。寂しい子ども時代に彼を慰め力づけたアーサー王伝説の騎士（大谷亮介）の度々の登場。さらに旅を撮影する撮影クルーが存在するメタシアトリカルな構造。ムワウドが故郷のレバノンで体験したり見聞きたりしたに違いない、同道した若者たちが語る苦しみと悔恨に満ちた惨い身の上話の数々。空想と現実、虚と実、過去と現在が入れ替わる複雑な語りのため、遠景化されたり前景化されたりする荒唐無稽な物語に観客は時に笑い、悲惨さに時に打ちのめされながらついて行く。死体が腐敗し腐臭を漂わせていくにつれ、重さが肩に食い込み背負うことが辛くなるにつれ、息子はかつて憎しみすら抱いていた父への愛、自己の存在とルーツ、さらに他者と未来について思いを馳せることができるようになる。過去をたぐり寄せながら未来に向かう旅はシアターラムの奥行きのある空間に配置されたシンプルな岩や壁などを利用して表象されていたが、海にたどり着くと空間前方に置かれていた装置が取り除かれ、照明によって美しくきらめく海が出現した。

若者たちが水葬を手伝う。身体に青い絵の具を塗りたくられたウィルフリードの父は長大な台詞を語るが、それは祈りの詩を朗読する聖者のように見えた。彼は父の聖像となり、かつて生きていた人々の存在を記録する電話帳とともに水底に沈められたのである。荒唐無稽な旅は、何度も繰り返し言及される名も知らぬ相手との情事の中断から始まったが、聖なるものを求める冒険物語の型をなぞりながら無数の人々の存在を顕彰し、以後の人生を共に生きる相手を得て終わった。死者役岡本健一の怪演と、自暴自棄になりながらもアイデンティティを確かめるに至った孤独な息子役亀田佳明の熱演を指摘しておきたい。亀田は劇団チョコレートケーキの座付き作家である古川健が文学座に書きおろした文学座公演『かのような私－或いは斉藤平の一生－』でも主人公役で存在感を示した。かつての評伝は偉人の一生を描いたが、平成の最後に上演されたこの作品は、今上天皇の1945年の誕生日に生まれた平均的な日本人、斉藤平が昭和から平成にかけてその時代の出来事を受け止めながら誠実に生きた姿を描いている。亀田が変わっていく価値観と変わらぬ情愛を示して共感を呼んだことを付記しておきたい。

（服部 記）

(3) 86. 『コーカサスの白墨の輪』、116. 『野外劇 三文オペラ』

2018年8月千種文化小劇場において、俳優館公演『コーカサスの白墨の輪』を観た。白墨の輪と同心円構造の円形舞台にコーラス役の歌手たちが常に載り、演じられているドラマを観察して場面転換で説明やコメントとなる歌を歌った。物語がスピーディに展開されたり中断されたりして観客はしばしば待ったをかけられ、いくらかの真実と嘘を見出すことができた。プレヒトの本がよく解釈されていると思われた。大野栄潤・渋川卓思の音楽は歌いやすいわけではないがわかりやすく良かった。

林光作曲坂手洋二演出こんにやくざ公演『白墨の輪』(2015)では舞台中央に大きな滑り台状の斜面を設置した舞台と登場人物の演技により、権力構造の動性と人間関係が鋭角で切りとられ描かれていたが、この上演は民話的な衣装(意匠)に包まれていた。

東京芸術祭 2018 直轄プログラム『野外劇 三文オペラ』にも出かけた。「東京芸術祭は東京一極集中に加担しません。」「ふだん劇場に足を運ばない人も、一流の演出家と実力派の俳優たちが、真剣勝負で作り上げた舞台に、ワンコインでふれられる。」という宣伝文句と池袋西口公園の円形空間での野外上演にまず引かれたのである。イタリア人演出家が大岡淳による新訳を用いて、どのように最終場面のエクスマキナー的な死刑回避に至る権力の行使を描くのか、現実の浮浪者が徘徊する都市の内部に虚構の浮浪者集団を出現させる図柄はどのようなものなのか興味津々であった。しかしながら、残念なことに11月19日も20日も雨のため上演中止であった。正確に言えば上演開始時刻の19時の時点で19日は午後からの雨がすっかり上がり、20日は17時過ぎから降り始めた雨が止みかけていた。出演者やスタッフはスタンバイしているが、重機を用いた装置は濡れて滑りやすく危険なので中止にしたとのこと。ならばなぜ「少雨決行」とチラシに載せたのだろう。

20日、主催者側の一人に筆者が、雨天の場合の上演場所の確保、上演開始時刻の変更、ダイジェスト版上演など対応の如何について尋ねると、「今後の検討課題としたい」という答えが返ってきた。さらに、「明日からは天気も安定しますから。」その翌日に東京を離れる人間に天気予報は必要ない。せめてソロパートの演奏を含むダイジェスト版上演を望むが、それは音楽会的な発想で演劇としては成立しないのだろうか。9月に開催された名古屋城野外オペラフェスティバル『トスカ』においても全5公演のうち3公演が雨天中止となった。ヨーロッパに野外劇場が多いのは雨が少なく、降ってもすぐ乾くからだ。夏のヨーロッパにおける開放感と祝祭性溢れる野外劇や野外コンサートの慣習を、雨の多い日本に持ち込むにはかなりの工夫が必要であると考えた。その後『野外劇 三文オペラ』は雨天中止がなく大いに盛り上がったと地方にまで聞こえてきた。スタッフの努力が無駄にならずによかったと思う一方で、雨天時の検討がなおざりにされないことを願っている。(服部 記)

(4) 100. 『ザ・チルドレン』

ルーシー・カークウッド脚本、小田島恒志翻訳、栗山民也演出の『ザ・チルドレン』を世田谷パブリックシアターで観た。海を背景に黄色い防護服を着た出演者3人の上演ポスターから想像していた内容と観劇内容は大きく異なっていた。夏の夕暮れ時に傾いた家屋のわびしい室内での3人の会話のみで成り立つこの1幕劇は、丁々発止で腹を探りあうミステリアスでどこかピンターを思わせる会話と高畑淳子のキレのいい動きで、休憩なしの1時間50分を集中して観た。声高に放射能の恐ろしさを告発するわけでも、科学技術のお蔭で便利となった日常生活とその裏に潜む非日常の荒廃を描き出しているわけでもなかった。しかし、振り返ってみると今ひとつ焦点が定まらない。そもそも『ザ・チルドレン』というタイトルがつけられているのはなぜなのか。

イギリスイーストコーストのコテージに住む夫婦ロビン(鶴見辰吾)とヘイゼル(高畑淳子)の元に「子供たちはどうしてる?」と、元同僚のローズ(若村麻由美)が鼻血を出しながら登場して芝居

は始まる。3人は近くにある原子力発電所の稼働に関わった科学者であったが、今はリタイアしている。やがてヘイゼルとの会話から福島原発を連想させるただならぬ出来事がイギリスで起こったということがわかってくる。ポリタンクの水が貴重な飲料水であり、食料の調達もままならないようだ。劇中ヘイゼルは野菜をその水で洗いながらサラダを作る。暖かな食事を採るのが難しく、トイレの水も簡単に溢れる不自由な日常生活なのだ。しかし、2人は自宅が津波に流された後もこの地になぜか止まり続け無農薬農業を続けているらしい。科学技術に背を向けた暮らしをしているというわけである。世話をし続けていると言われている牛は実はすでに死んでいるが、ロピンはヘイゼルに事実を隠したまま、牛を葬る穴を毎日掘っている。アドリブかしらと思わせる発話を楽しむうちに、次第に普通の市民となった3人の恋愛関係を含む関係性、欲望、家族に対する思い、健康状態、性癖などが明らかになってくる。傾いたコテージ室内の現在は外の世界の崩壊した過去と危機に瀕している来たるべき未来と地続きである。3人の中で一番だらしがなかったローズは、かつての同僚たちと原発処理作業の若い作業員に取って代わろうと誘いにきたのだった。

放射能に侵されているロピンが行く決心をする一方で、健康に気をつけているヘイゼルは理由を並べ立て同意できないでいる。科学者として自分たちが作った発電所に責任を持たなければいけないというローズの主張に、何故自分たちがそうしなければいけないのか納得しないものの「どうしたら、多くを望まないでいられるか」と語り、2人を現地まで送り届けるという。彼女もそのまま仲間に加わるかもしれないが、それは分からない。大人たちの行ってきたことの責任や未来の子供たちに何を託し何を残すのか、先送りにしていないのかが問題となっているのである。病に侵された人間や若い先短い人間が原発処理にあたるにふさわしいということではない。この後、海から聞こえてくる鐘の音にローズが言及する。静かに響く鐘は過去を弔うと同時に来るべき未来に対する祈りである。コテージ内に滲入してきた海水をロピンが箒で掃き出し続ける傍らで、反目していたヘイゼルとローズが明日がわからない状態でありながら健康維持のための日課のヨガを始める。室内は青い神秘的な光で満たされて幕となる。唐突な会話で始まった舞台は、無駄な抵抗ともみえることを静かに続ける姿勢を示して終わりに至った。

劇中では登場人物にも話題に上った人物にもファーストネームしか与えられていない。「ヘイゼル」「ロピン」「ローズ」という名が暗示するとおり、彼らもまた自然の一部でありその直面している問題は現代社会にあって抜き差しならない。英語の原題 *The Children* はこの地上の人間すべてを示しているのであろうし、ロピンが三輪車を室内で乗り回す行為もそれを暗示していると考えられる。カークウッドは「演劇の美しいところは、観客がその意味の半分を創るということです。」と上演パンフレット(7頁)で語っている。彼女はフクシマのニュースからヒントを得てこの作品を作ったという。原発処理には政治が絡みブラックな話題も多い。話の展開には多少の違和感を覚えざるを得ないが、この演劇は原子力発電所の存在を問題にしているのではなく、利益追求とテクノロジーを優先させて住みやすくなった現代社会に向けてまずは異議申し立てを行っているのである。ローズの問いかけに立ち止まって耳を傾けなければいけないのは私たち観客である。シアタートラムのようなもう少し狭い空間で演じられれば尚よかったと思われる。(服部 記)

(5) 136. 『ウリッセの帰還』

バロックオペラのモンテヴェルディ作曲『ウリッセの帰還』を北とぴあ音楽祭で観た。寺神戸亮のバイオリンの弾き振りとこれまで見たこともなかったヴィオローネなどのビリオド楽器を用いたレ・ポレアードの演奏、バロック歌手の豊かな響きのある歌声に加えて、カンパニーデラシネアを率いる小野寺修二の初のスタイリッシュな演出がバロックオペラを観る楽しみを増してくれた。

モンテヴェルディ作曲『ポッペアの戴冠』の上演は2度ほど見たことがある。いずれも映像でよりも実際の舞台の方が面白いという印象を持った。繰り返される音楽の心地よさ、寓意的な人物であるアモールや知恵などが登場する語りを外枠にして世俗的なエピソードと愛憎と権力を持つ人間の力技のドラマが埋め込まれている作品は躍動的で魅力があった。しかし、『ウリッセ』はポネル演出アーノクール指揮の映像で予習した際さほどドラマティックに思われなかっただけに、この公演は期待以上の出来で、大感激であった。

さくらホールでは反響板が置かれた舞台後方左右に分かれて器楽奏者が座り、舞台中央と前方の空間で歌手と男女一人ずつのパフォーマーがドラマを表現していた。器楽奏者と歌手が同じ板の上に立つ演奏会形式であることは、一般に音楽を重視するもので、視覚・演劇表現が軽視されがちである。最小限の言葉と身体表現で物語を語りだす演出家の小野寺は演奏会形式という制限やバロックオペラにおけるダ・カーポアリアの繰り返しを利用し、音楽を優先して動線を考え自然な身振りから物語を紡いでいったと思われる。舞台上では大小のテーブルと数脚の椅子、石黒猛制作の素敵な小道具の数々、帆船や弓、多目的な扉などがパフォーマーによって配置を変えられ場面転換がスムーズに行われた。歌手たちは歌に合わせて身体表現を繰り返し感情表現を高めていった。特に印象的だったのは、20年間夫ウリッセを待ち続けたペネーロペに対し求婚した3人の男がウリッセの弓を引くことを試みる場面である。次々と挑戦する邪悪な求婚者が弓に触れることもできずおののき退散する様子は、スポット照明で拡大され舞台後方の反響板上で影絵となって戯画化された。繰り返され高まっていく音楽とともに楽しませてくれた。振り返ってみれば音楽と身体表現が一体化しバロックダンスの様式となり、舞台装置や照明、美術も小野寺演出におなじみのステージングとなっていた。

ペネーロペが老人をウリッセと同定するに至る最終場面では乳母エリクレア（波多野睦美）がウリッセの足の傷を明かし、続いてウリッセ（エミリアーノ・ゴンザレス＝トロ）が夫婦しか知らない寝室のタペストリーの絵柄をエクブラシスの技法で再現し感動を伝えた。寓意的な人物「人間のもろさ」「時」「運命」「愛」の登場で幕を開け、神に介入され翻弄される人間の運命の虚しさが最後に喜びにとって代わる。若者と老人、善良な羊飼いと欲深い羊飼いが対比され最後に善が勝利する。中世的なアレゴリー形式で始まりながら、最後に人間賛歌で終わったのである。

歌手たちはいずれも実力者ぞろいだった。ペネーロペ役の湯川亜也子は当初少し硬かったが、夫を待ち続けた20年間の揺れる思いを非常に丁寧に情感豊かに歌った。上杉清仁、小笠原美敬なども素晴らしく日本のバロック歌手の質の高さに改めて驚いたと同時にモンテヴェルディのオペラがドラマティックで楽しいものであることに気づかされた。

(服部 記)

(6) 122. National Theatre Live 『フォリーズ』

2018年10月20日(土) 12:20~ ナショナル・シアター・ライブの『フォリーズ』(*Follies*)を観劇した。劇場でなく映画館上映の作品なので、「観劇」とするのは気がひけるが、私にとって今年最高の見事な舞台であった。実は2017年夏のロンドンに必見の舞台と思って出かけたのに、開幕前8/20に到着するやチケット売切れと知り、滞在中に観劇できなかった(2017年8/22~2018年1/3までの公演)。そこで、NTLで見ることができて感激ひとしおだった。

この舞台は、イギリスでは30年ぶりの*Follies*再演と騒がれるが、1971年ブロードウェイ初演ではなく、1987年ウエストエンド(West End)初演舞台(Mackintosh制作)から数えている。しかし、今回の2017年舞台は、初演版に基づいている。この30年間、英国ではコンサート形式上演と、*Follies*の歌曲も含めたソンドハイム(Stephen Sondheim)のミュージカルの名曲を繋いだショー(*Side by Side by Sondheim*など)が幾つも初演成功しているが、装置を備え全曲演奏される*Follies*の本格的舞台上演は行われなかった。

*Follies*はSondheim作品中でも名曲揃いの作品であるが、ハロルド・プリンス(Harold Prince)好みの大掛かりで贅沢な舞台に主役級の名歌手を数多く並べる華やかな初演版は、経費がかかり過ぎ本格上演が難しい。そこでロンドンでは稀有な本格公演もナショナルだからできると話題になり、ロイヤル・コートの芸術監督ドミニク・クック(Dominic Cooke)^[1]の初のミュージカル演出であり、またオリヴィエ賞主演女優賞を4度獲得しているイメルダ・ストーントン(Imelda Staunton)主演という点でも、開演前から期待が高まっていた。

舞台*Follies*は、まさに取り壊されんとするフォリーズの劇場に、フォリーズの興行主ワイスマン(Dimitri Weismann)氏が、昔のフォリーズ・ガールズを招いて、昔のヒットソングを歌い踊ってもらうパーティを催すという趣向のミュージカルである^[2]。ワイスマン氏は有名なフローレンツ・ジークフェルド(Florenz Ziegfeld)を、彼のフォリーズとはZiegfeld *Follies*^[3]をモデルにする。この*Follies*のアイデアは、Ziegfeld *Follies* Girls Clubが同窓会を催すという記事を、脚本作家James Goldmanが読んで^[4]、この同窓会を主題に書きたいと思ったこと、さらに初演制作・演出家Harold Princeが、壊されかけた瓦礫の散らばる劇場に立つ昔の大女優グローリア・スワンソン(Gloria Swanson)^[5]の写真に感銘を受け、老齢の女優が過去の栄光に生きるのは愚かだ、華やかな過去と老齢を対比しようと考えたことから始まった。舞台*Follies*の時代背景は1971年初演の30年前に終了したフォリーズと設定されている。取り壊されて無くなる劇場で、いわばフォリーズの葬式として、ワイスマン氏は昔のフォリーズを偲ぶ同窓会を催すことにする。そこで、2つの大戦間にBroadwayを席捲したフォリーズを模したショーを、昔のスター達が歌い、その栄華を再現して見せる。パーティの客として、1971年当時流行したドレスで精一杯着飾ったフォリーズ・ガールズが登場する。一方では、舞台奥の暗い隅に積み上げられた瓦礫に座った大勢のフォリーズ・ガールズが暗い中に亡霊のように青白く浮かんでいる。彼女達は昔のガールズ特有の華やかな衣装を身につけ、自分の未来である今日の客の傍を横切りもする。ベル・エポックのパリのフォーリー・ベルジェール(Folies Bergère)^[6]に倣った、柔らかい色合いの薄物で露出度の高いドレスや、女性美を誇示する前の開い

た羽根製の短いスカートを纏い、それに頭上高い駝鳥の羽根飾りや王冠に似た華やかな飾り、キラキラ輝く装飾付きの黄金の環などの頭飾りをつけている。彼女達が潜む暗い中でも煌くように、頭飾りもドレスもスワロフスキー (600,000 Swarovsky crystals) で飾られている。ヴィッキィ・モーティマー (Vicki Mortimer)^[7] デザインの衣装は亡霊達のだけでなく、数世代にわたる流行を反映する様々な衣装であり、さらに配役に合わせた何種類もの凝った衣装なので、見ごたえあり舞台の雰囲気を高めている。舞台美術家でもあるモーティマーは、瓦礫の散らばる劇場で始まる舞台装置を基本に、22もの歌やダンスの度にそれらしい背景と小道具を使い、過去と現在を行き来する物語を巧みに表現し、観客を舞台に引きこんでいる。

舞台には、今は中高年になったフォリーズ・ガールズと、昔の華やかなフォリーズの衣装を着た過去の彼女達 (亡霊) とが同時に存在する。給仕長のロスコー (Roscoe) 氏に迎えられ、昔の大階段を降りた登場のように、今では唯一残った非常階段を、昔のスター達は自分の出演した年代を示すタスキを肩にかけ、一人ずつ、スターらしく気取って、ワイスマン氏のいるホールに降りて行き、パーティが始まる。この間、Roscoe 氏はワイスマン氏に紹介するために、天上的に聞こえる “Beautiful Girls” を歌う。昔、大勢の若いフォリーズ・ガールズの舞台脇に立って、美しい娘達の賛美を歌ったテナーのように、甘い歌声を響かせる。この美しい曲は、アービング・バーリン (Irving Berlin) の “A Pretty Girl is Like a Melody”^[8] という「アメリカの美女」を称揚するジークフェルド・フォリーズの主題歌を模している。だがコーラスは、Sondheim の歌詞で美と華やかさは過去のもの、虚構だから注意しなさいと観客に呼びかける。Dominic Cooke の演出は、この過去と現在の二重構造を示し、それでいて、二者を鮮やかに統合している。

この歌を始め、今宵の客達は、昔のフォリーズの舞台で演じたように、それぞれのヒット・ナンバーを歌い演じる。それらはフォリーズの全盛時代に Broadway で歌われ、踊られた歌曲を、Sondheim が作詞・作曲した模倣作品 (pastiche) であり、スター達は昔の Broadway での歌い方、踊り方で、それぞれのヒット曲を披露する。だが、フォリーズ解散から 30 年という設定では、この *Follies* の出演女優達は、どんなに若くとも 40 代後半 50 歳以上でありながら、歌やダンスは昔を偲ばせるほど巧みに歌い踊らなければならない。この非常に難しい基準に合う女優を、よくぞ見つけ選んだものだと感嘆する。これらのいわば筋のない歌謡ショウのようなもの他に、この *Follies* にはもう一つ別の物語がある。

もう一つの枠組は、1940 年にフォリーズのコーラス・ラインだったサリー (Sally) と 1941 年のフィリス (Phyllis) の愛と結婚の物語である。そして始めに、“Girls Upstairs” という長い歌 (scene) で、二人の若い娘 (サリーとフィリス) と、彼女達の大学生の恋人バディ (Buddy) とベン (Ben) との 4 人が紹介される。過去を演じる俳優達は前述の亡霊ではなく、生身の若者として登場し、観客に過去の物語を伝える。4 人の過去と現在が、この *Follies* 全体に流れる筋となる。過去を思いだす現在の 4 人の前には、夏のワンピースを着た若い娘達、そして恋人の若い 2 人も登場する。彼女達がフォリー・ガールズだった頃、毎晩フォリーズの楽屋口で終演を待っていた恋人と 4 人で遊んだ青春の思い出が語られる。この同窓会の再会で、現在の 4 人が過去を振り返り、現在の愛と結婚

の状況が別のものだったかもしれないと考えるのだ。過去の4人は過去の姿を演じるだけでなく、現在の4人が会話し歌うのに、反応し、最後には現在の人物と共に演じる。

Sondheim 好みの過去と現在、時間の流れによる重層的構造が、4人の深層心理を露にする。ショウの部分は当然筋が無いが、この4人の物語では、音楽と台詞の両方で人間性を表すドラマが描かれる。昔のフォリーズを再現する歌謡ショウの方も、スター達がこれまでの経歴や生き方を語るの、過去の栄華と現在、または老齢や孤独という栄光との落差が描かれる。

まずショウの歌の開始として、初期フォリーズの代表的な3曲を続けた“Montage”(モンタージュ)が披露される。フォリーズで観客を楽しませたのは、コミックな小さなドラマ(コント)を演じながら歌い踊るペアの寄席芸であった。小さなコント“Rain on the Roof”を、コミック・ダンサーの兄妹ペア(Theodore Whitman と Emily Whitman)が歌い踊る。pit-pitty-pat-pitty や plunk-plunka-plink という雨の擬声音が入り、雨傘をさして踊る二人が、雨だれの音に合わせキスをするという愉快的場面である。最後の lovely rain の歌詞から、*Top Hat* (1935 公開映画) で Fred Astaire (フレッド・アステア) と Ginger Rogers (ジンジャー・ロジャーズ) が“Isn't This a Lovely Day (to be caught in rain)”の歌に合わせてタップを踊ったコミックな場面を思いださせる^[9]。だが雨傘で踊るのは“Singin' in the Rain”の歌を思い浮かばせるだろうか。ともかくビル・ディーマー (Bill Deamer) の振付は、彼の得意な 1930 年代風タップ・ダンスを再現しながら、Deamerらしい味付けがされ、楽しい場面だった。

ジークフェルドと同じように 1920~30 年代当時 Broadway で繁栄していた喜劇の殿堂、パレス・シアター (Palace Theatre) を目標にしていたヴォードヴィリアン達(喜劇的な短い芸を見せる喜劇俳優)がみせるこのような寄席芸が当時のショウの中心だった。

次に初期のヘッドライナーだった Solange LaFitte がフランス風衣装を着て“Ah! Patee”というフランス発音混じりでパリ賛美の歌を歌い、初期フォリーズのフランス模倣とフランス崇拜を伝える。こうしたパリ崇拜と愛と誘惑のフランス文化を示す歌詞と曲は、当時パリに住んだ (1917-1939) コール・ポーター (Cole Porter) のパリ風で性的誘惑を仄めかす都会的で洒落た歌を思いおこさせる^[10]。

次のヒット・ソング“Broadway Baby”は、1920年代のジャズ・エイジに大流行したタップの代表的スター歌手ハッティ (Hattie) によって歌われる。Hattie は年齢のせいか、タップを踊らず化粧台に座って歌う。また“Broadway...”というタイトルは、毎年の Ziegfeld Follies を模倣し、年号つき題名で *Follies* を背景に作られたミュージカル映画“Broadway Melody”を思いおこさせる^[11]。

この後は、前述した主要人物4人の物語を歌う歌 (character song) とフォリーズのショウに似せた歌 (show song) が交互に歌われるが、先ず、魅力的なショウの歌を紹介したい。もちろん過去の Ziegfeld Follies の歌そのものではなく、Sondheim が模倣した歌 (pastiche) である^[12]。

ショウの中で個人的に最も好きなのは、ホイットマン (Whitman) 兄妹のロマンチックなダンス、「愛のボレロ」 (“Bolero d'Amour” または “danse d'Amour”) である。前述の Fred Astaire の tap dance を巧みに再現した *Top Hat* (2012, West End 初演) の振付家として名声あるビル・ディーマー

(Bill Deamer) (2013 Olivier 賞振付賞)^[13] の振付による美しいダンスの場面が印象的で、二人のダンスにうっとりさせられた。この愛のダンス場面は、公演により短縮・省略もあるようだが、今回は Bill Deamer の振付と指導があればこそ、単なる tap dance 以上の優雅で上品なダンスの美しい場面が再現された。衣装も Astaire & Rogers のダンスを思わせ優雅で美しく、ロマンチックな恋の雰囲気にあふれていた。

最も古い年号 1918 年のタスキをかけて 1 番年長のスター、ハイディ (Heidi) として登場したバーストウ (Dame Josephine Barstow, 1940 年生)^[14] は、豪華な総レースの白いロングドレスといい、気品ある美しい姿で、ウィンナ・オペレッタ風の懐古的な名曲 “One More Kiss” を美しく歌って聞かせた。だが、やがて 1918 年出演から 70 歳とされる年齢のため少々高音が難しくなったと演技する。すると傍に来ていた彼女の亡霊の若いフォリーズ・ガール Young Heidi (実は新進オペラ歌手 Alison Langer) が後をひきとって歌う。一瞬驚いたような顔を見せる Heidi だが、後は、高音部分を助けて奇麗に軽やかにコロラトゥーラを響かせる Young Heidi と声の絡みあう美しい duet となる。通例、Heidi 役には年輩のオペラ歌手やオペラを歌えるだけの有名歌手が選ばれ、ただ美しく歌うことが期待される。この舞台の Dominic Cooke 演出による 2 人の演技と duet の歌唱は、単なる美しい歌唱に終わらず過去と現在が対比され、同化され、心に迫るものとなり、スター歌手の哀愁ただよう歌唱に感動させられた。ウィンナ・ワルツ風の “One More Kiss” を捧げられたと語るのもぴったりの Barstow が、彼女の持ち役『薔薇の騎士』の伯爵夫人のウィーンの典雅な雰囲気をもって歌い、名曲の香りを高めていた。若さに恋を譲る高潔な気品をみせる伯爵夫人のような Barstow は、オペレッタの世界を彷彿させた。この場面だけで、*Follies* を見た価値があると感じいらせる名場面だった。

20 世紀初頭に欧州からやって来てアメリカに永住した音楽家ヴィクター・ハーバート (Victor Herbert)、ルドルフ・フリムル (Rudolf Friml)、ジグムンド・ロンバーグ (Sigmund Romberg)^[15] といったウィーンやドイツで学んだ作曲家達は、レハールに続いて 20 世紀初めの Broadway に多くのウィーン風オペレッタを流行させた。当時盛んに上演されたオペレッタは、ジャズ・エイジに染まったミュージカル・コメディに圧倒されるまで、大きな潮流であった。この歌はミュージカルがオペレッタから始まったことを教える。

次に、ステラ (Stella) は “Who's That Woman” というコミックな歌を歌い、昔のフォリーズの女性全員で踊るタップ・ダンスをリードする。“the Mirror Number” を一人でダンスするなんて嫌よ、「皆でやりましょう」と言う Stella Deems (Dawn Hope)^[16] に誘われ、フォリー・ガールズだった女性達全員が、コーラス・ラインのように横 1 列になり、互いに両手を組んでタップを踏む。オリヴィエ劇場の円形舞台を生かして、舞台をぐるっと回り、リズムとビートにのったタップを披露する。皆が “Who's that Woman” の 2 節に続いて the mirror number を踊っていると、過去の若い姿のフォリーズ・ガールズ (亡霊) が次々に彼女達のダンスに加わる。若い娘達は、タップ全盛時のタップを踏んで魅力的に見える非常に短いスカートを身につけ踊る。大勢の tap shoes のリズムを刻む靴音が響き、早いビートが印象的である。“the Mirror Number” という題名といい、全員の揃っ

たタップ・ダンスといい、初演振付家マイケル・ベネット (Michael Bennett) (*A Chorus Line* (1975) で名声) が、初演舞台でトニー賞を獲得したことを思い出させる^[17]。

最後に、ショウの歌で圧倒の人気だったのは、ラテン的赤いドレスが華やかなカーロッタ (Carlotta Campion) の “I'm Still Here” である。最近 West End で 2016 年の Olivier 賞主演女優賞候補になったトレイシー・ベネット (Tracy Bennet 1961-)^[18] が歌う。Carlotta は、今も TV 女優で活躍している現役スターで、「フォリーズを辞めてから、良い時もあればひどい時もあり、呼ばれれば、年寄役でも何でもやり、まだお呼びを待っているのよ」と挑戦的に歌う。だが華やかな過去から、段々と遠去かっていると分かる。Sondheim は Carlotta 役に、迫力ある声量 (belting) と魅惑的な声のエセル・マーマン (Ethel Merman, 1908-1984)^[19] の歌唱 (belting) を彷彿させる主役級スターを想定して作曲した。マーマンは、舞台『アニーよ、銃をとれ』 (*Annie, Get Your Gun*, 1946) と『ジブシー』 (*Gypsy*, 1959) の主役を演じ、それぞれのヒット曲 “There's No Business Like Show Business” と “Everything's Coming up Roses” が、彼女の魅力を特徴的にみせる歌として愛されている。実はそれ以前に Gershwin 作の musical comedy の名作 *Girl Crazy* (1930 年初演) (*Crazy for You* (1992) の原型) で歌った “I Got Rhythm” が、彼女の魅力的歌唱を世に知らしめた。また、*Anything Goes* (1934) のヒット曲の歌唱も有名である。これまで Carlotta 役に、ロンドン初演には Dorothy Gray (*Annie Get Your Gun*, London 初演 1947 ; *Gypsy*, London 1973) が、2011 年に Elaine Paige (*Evita*, 1978; *Anything Goes*, 1989) が選ばれた所以だ。この *Follies* 公演では、人気女優 Tracy Bennet の登場に、観客は大喜びである。ただ、マーマンの機関車のような迫力ある声には及ばず、マーマンの belting 歌唱でもない。しかしミュージカル *Mrs Henderson Presents* (Noel Coward Theatre, 2015) 主演の役柄通りの円熟した声を響かせ、女盛りの魅力に溢れた美しい舞台姿であった。

さて、ショウの再現以外の枠組は、前述したようにフィリス (Phyllis) とベン (Ben) 、サリー (Sally) とバディ (Buddy) という 2 組の夫婦の物語である。Sally は営業マンの Buddy と結婚し、成長した子供達もいて、アリゾナ州フィニックスに幸せと見える中流家庭を築いている。一方の Phyllis が結婚した Ben は、外交官や国連大使を務め、今は人道的信託財団理事をしている。Phyllis は彼に相応しい教養あり社交上手な妻になろうと努力し、今もエレガントでクールである。一方、Sally は 4 人組で遊んだ 30 年前から、Ben を恋し続け、この再会を機に Ben の愛を取り戻そうと思っている。それを夫の Buddy も承知していて、再会するや、Sally の執着を Phyllis に説明する。Buddy は愛してくれない Sally への不満から、実は愛人を囲っている。WASP の成功例のような Ben と Phyllis の結婚生活も、成功のみに捉われた Ben と心の通わない Phyllis は不幸である。華やかな結婚の陰に、2 人は結婚の誓いにそむき、小さな浮気を重ねる。2 組の夫婦は中年の危機にたち、昔の愛と若さを取り戻せればと思っている。

そして前半のショウ・ソングの連続の中でも、この 4 人の歌が挟まれて歌われ、ショウではなく人物と人間関係を語っている。さらに *Follies* の最後に Loveland と名づけられたフィナーレが配置さ

れるが、そこでは、過去の若い4人が、“Loveland”の歌に導かれ過去を演じた後、主要人物4人のショウが行われる。このLovelandはZiegfeld Folliesの最後の30分に、大きなプロダクション・ナンバーを立て続けに演じ、主役に喝采をもらって、ショウの幕を閉じたフィナーレを模したものである。そこで瓦礫の混じる劇場の暗い舞台から、一転して天上的音楽が流れ、美しい垂れ幕が暗い背景を隠し明るく照らされた舞台になり、華やかなショウの世界Lovelandが始まる。Lovelandでは、始め若い時の2組の恋人がそれぞれ愛を語り、結婚する未来では愛がすべてを叶えてくれる“ You're Gonna Love Tomorrow ” [Young Ben] と、“ Love Will See Us Through ” [Young Buddy] という Jerome Kern に似た愛の歌^[20]で folly を演じる。その後現在の4人がそれぞれフォリーのスター芸人の扮装をし、芸人として love について歌い踊る4つの folly がある。

このフィナーレで4人組が演じる“ folly ”には、18世紀英国貴族の道楽だった偽物の廃墟 folly の建築（狂気の表現）から「愚かさ、嘘、虚構」という意味がある。故に、ここの finale としての Loveland の folly は愚かさ、虚構、非現実である。その非現実的世界では、4人は Sally や Phyllis の現役時代の芸人の衣装と演技で、嘘と愚かさを明らかにする。皆、芸人になって（虚構）、自分の心の奥底にある愚かな嘘と狂気の思いを演技化し、さらけ出す。そしてその folly が終わった時、現実に戻るという仕掛けになっている。

ここでは、Loveland で歌われる4人の folly を、前半のショウでの4人の歌と関連づけて検討してみたい。ショウの始めに歌われる Sally (Imelda Staunton) の歌は、恋する Ben に再会して、年取った私を見ないでと言いながら、若い時の恋を取り戻したいのが明らかな“ Don't Look at Me ”である。“ In Buddy's Eyes ”は、自分は夫 Buddy に愛され幸せな結婚をしていると Ben の前で虚勢をはるが、心の底では Ben に対する愛が渦巻いている。1940年のタスキから見ると同窓生の中で最も若い Sally を、Imelda Staunton は前半の2つの歌で今もロマンスに生きていて、ある意味愚かな恋心みせ、輝くばかりに可憐な「若い娘のように」演じて見事である^[21]。2015年の Gypsy ロンドン公演 (Savoy Theatre) で、年配の母親 Mama Rose を演じた Staunton の名演技と見事な歌唱に感動した。悲喜こもごもの出来事が続く劇場人生を彼女は魅力的に演じ、最後の“ Rose's Turn ”の熱唱には、心を打たれた。ここでは若い娘の時のまま非現実的妄想に浸る Sally を、Staunton が Rose とは大きく異なる世間知のない恋に溺れた女性として演じてさすが名女優と感嘆した。それに対し、まったく知らなかった（と観劇時思った）Ben を演じるフィリップ・クワスト (Philip Quast, 1957 生) には最初の歌で、見事な歌唱に驚嘆した。何と美しいテナーだとうっとりした。その上、いかにも成功した紳士らしく堂々と演じる姿は、まさにこの Follies の leading man に相応しい。Quast が『レ・ミゼラブル』10周年記念 Concert (1995) での Javert と知って納得だった^[22]。だが、この歌“ The Road You Didn't Take ”で、Ben は口では成功は望んだ通りのものを与えると自画自賛しながらも、自分が通らなかつた過去は思いだすこともない、これまでにしなかつたことを後悔しては成功者とは言えないと歌う。あまりに見事な歌唱に欺かれ、その欺瞞に気付かなかつた。しかし希望通り成功した自分は他の道は知らなくて良いという自信満々のこの歌は、実はアメリカン・ドリームを叶えた男のエゴだけを見せ精神性の無視を示していた。フィナーレの Loveland の Ben の

folly “Live, Laugh, Love” では、Quast は “Top Hat, White Ties and Tails” と歌う Astaire の扮装で歌い踊る。背景には彼と同じくステッキを片手に持ち、山高帽を被り、白い蝶ネクタイをつけた燕尾服という正装の男性コーラスを従える。まさに Astaire の “Top Hat” の歌や、“Puttin' on the Ritz” などと同じスタイルである。素晴らしい上昇人生を歩み成功し laugh と love に生きると歌い始めるので、始めは Astaire を模倣した楽天的な歌とダンスと思い、さすが Deamer の振付だと、Quast と男性バック・ダンサーのアステア風の整然としたダンスのキレの良さ、美しさに感心し楽しんだ。が、Ben は後半に人生に浮き沈みもあると失敗や欺瞞の数々に言及する。急に歌詞を忘れ、実は love と laugh がないと明かし、指揮者に教えてもらい芸を続ける。“laugh” の歌詞で歌が歌えない失態が2度ほど続き、最後は何もできず、演技を離れ男性コーラスの間を走り回る。これまでは嘘の人生だった、自分はベテン師だと告白すると倒れてしまう。つまり、彼は楽天的で幸福な Astaire にはなれなかった。人間味を忘れ成功と上昇のみ求めた結果、folly の狂気の中で老いの近づく今、愛と笑いが無かったと気づく。自分まで欺いてきた嘘に言葉が続かない。成功の人生は無かったも同然と、空虚な人生と空虚な自身を認識し絶望する。このように、Loveland のショウ folly (虚構) は、過去が虚構にすぎないという認識から絶望を導く。この Ben の絶望は、American Dream を叶えて、愛を得て物語が finale を迎える Rogers & Hammerstein が誕生させた musical の正統から離れたものである。他の3人も Ben の歌ほど明白ではないが、過去を取り戻すことはできないという意味で、若い国の理想だった American Dream が可能ではなく、成巧が夢の実現ではないという認識を示す。これは American Dream の幸福な決末と反対の主題を提示する musical となる。

Ben を愛する Sally は、フォリーズ初期の流行歌 torch song のスタイルで “Losing My Mind” を歌う。恋人に捨てられても、彼を愛し続ける情熱的な女の歌 torch song に合わせ、彼女は男を誘い惑わす女のように、なまめかしい銀色に輝くドレスに装い、Helen Morgan^[23] のようなキャバレー歌手に扮している。1927年初演の *Show Boat* (Hammerstein の歌詞・台本) において、Helen Morgan が歌って有名になった歌 “Can't Help Lovin' Dat Man” が torch song の典型である。「世評の悪い男でも、成功しなくても、彼を恋人として死ぬまで愛するわ」と歌う。Sally の “Losing My Mind” は、失恋の嘆きを超えて、恋の激しい想いのあまり理性を失い、ほとんど狂気に陥っていると示す。最後の節は心乱れて、声もでないような哀れを誘う歌い方であった。Sally のショウ folly が終わると、torch song らしく灯りが薄暗くなり、Sally だけが照らされ、カーテンが閉まる。前半では、過去を美化し、過去の愛を取り戻そうとする Sally の妄想を明らかにする。が、最後の folly では過去の愛は虚構と認めざるを得ない。その恋に溺れた気も狂わんばかりの過度の愛を演じて、Ben に応えてもらえない。彼女の恋の対象の「理想的愛人 Ben」は彼女の妄想の産物であり、実際の彼には愛がないのだから。彼女の愛は現実とは相容れないと認識せざるを得ない。Sally を一時だけ有頂天にさせた「愛している」という Ben の言葉は (“Too Many Mornings”)、現在の Sally 自身ではなく、30年前の Young Sally を見、過去の Sally に向けて言ったものだった。この Ben の視線の意味は、舞台上で明白に演技されていた。Ben は Young Sally を抱き、その傍で Sally は自分が抱かれているかのようにうっとりする^[24]。結局、Sally は非現実的妄想的恋を歌ったのだ。

Ben は 30 年前の過去の若い Sally を一時は愛したが、彼女が処女を捧げた後、興味をなくし Phyllis と結婚した。次に Phyllis を愛して結婚したものの、彼女を自分のものにした後は、セックスレスな仮面夫婦である。ここから、Ben は石（彼の姓が Stone）のように冷たく、新しい女の征服を楽しむだけの、愛を深めることのない自己中心の冷たい性格とわかる。それゆえ、同窓会で再会した Sally にキスしてみるものの、彼女が去った途端、Carlotta を口説く。

そこで、冷たい関係の結婚を妻の非のごとく Ben は「愛がないのだから離婚しよう、別れよう」と言う。30 年間妻として尽し生きてきたのに、離婚と言う彼に、Phyllis は心の通わない結婚について “Could I Leave You” と歌う。“Could I Leave You” は Loveland の前だが、すでに 2 人の結婚の内実と Phyllis の葛藤する心を露わにしている。「どうして別れられるだろうか？ 一人になって南フランスで暮らすのか？ 自殺を考えるのだろうか？ もうずっと以前に別れてしまったのに、どうして今別れられるだろうか？」と Phyllis は歌う。彼女が結婚前に願った夢、内助の功ゆえに成功した男 Ben の妻として愛し愛される結婚という夢は、外見上叶えられたが、内実は Ben への自己犠牲と愛の無い不幸な結婚だったと明らかにする。その結婚ゆえに、自分自身を失ってしまったのではと気づく。この歌は、詩的な歌詞により語られる彼女の繊細な心情が、観客に訴え心に残るものとなっている。

この Phyllis の心理と壊れた結婚を語る歌の後に、Loveland の Phyllis の folly がある。Jazz のトランペットが鳴り、突然明るくなる。そして Phyllis が鮮やかな色の 1920 年代のショウ・ガールらしい衣装で長い美しい脚をみせて、いきな目つきで眺めまわし、彼女のショウが始まる。彼女の背後に Young Phyllis が登場し、このショウは duet となる^[25]。

Phyllis の “The Story of Lucy and Jessie” の歌は、過去と現在の自分を 2 人の女として語り、また自分の戻りたい過去の若い娘と対比して自身の分裂した心を語り興味深い。初演と違い、Phyllis 役の Janie Dee^[26] と Young Phyllis 役の Zizi Strallen^[27] が共に歌いダンスし、歌もダンスも巧みな優れた女優 2 人の素晴らしいショウとなる。歌は過去の Phyllis (Young Phyllis) を Lucy と呼び、現在の中年の Phyllis を Jessie と呼び、2 人の対比的な性質を描く。「若い Lucy は 21 歳。純粋だが冴えない。Jessie は夫の成功で世俗性を得て大人だ。だから Jessie は昔の若い純粋な Lucy に、Lucy は洗練された大人の Jessie になりたいのだ。もし二人の性質を両方とも持てるなら素晴らしいのだが」。

成功した Ben の歌からも、Phyllis の 2 つの歌からも若い時にあった 2 人の愛が消え去り、物質的外面的華やかさだけの 2 人の空虚な結婚が明確になる。

この folly の歌はなかなか含みのある歌詞で Phyllis の分裂する心を描いて深刻である。ところが、対比的に事物を並べ面白がらせる Cole Porter の comic song を思わせる歌詞でアブテンポで軽快な音楽に合わせた女優 2 人の巧みな楽しいダンスで、Phyllis の結婚を風刺する喜劇的な見ごたえのあるショウになった。

Folly の最初は実は Sally の夫 Buddy の演じる folly である。この folly の内容はその直前の “The Right Girl” の状況とほぼ同じであるが、今度はショウであるので、Follies のコーラスガー

ル2人によって愛人の Margie と妻の Sally が戯画化された人物として登場する。Buddy は Sally との家庭の他に、旅のセールスマンとして知り合った Margie と同棲していて、2週間ごとに彼女と週末を過ごす。「Margie こそが僕にぴったりな女 the right girl だ。彼女は本当に僕を愛してくれ、優しい。彼女と結婚しようと思うこともある。そうすれば幸福になれるのだ」という “The Right Girl” は、Loveland の直前に歌われた。

“The Right Girl” の後、Buddy は、「結婚は終わりだ」と Sally に言ったものの、Ben と結婚すると言い張る Sally には怒り狂う。この後、彼の folly、“Buddy's Blues”^[28] が始まる。このショーは folly なので、Buddy は、アボットとコストロ (Abbott and Costello) などの当時のコメディアンの芸人に扮している。1930-1940 年頃流行の派手な縞模様のジャケットと太い幅広のズボンを着て、チャップリン以来喜劇俳優が愛用する山が丸い黒のフェルト製帽子 (derby hat) を被っている^[29]。そして Buddy の思うにまかせない憂鬱な気持ちが当時の流行曲ブルースで歌われ、「僕を愛してくれたっていいじゃないの？」(The- God- Why- Don't- You- Love- Me- Blues?) というブルース的 refrain がある。彼の愛人の Margie を演じるコーラスガールは、妻の存在を知りながら「私のヒーロー、愛しているわ。あなたは完ぺき。永遠にあなたのもの」と言い、男からみて都合のよい理想的な愛人タイプである。戯画化された Sally も、誘惑的に腰をふりつつ登場する。彼女は、性的魅力をひけらかす女らしく、舌たらずの口調で「Ben が私の偶像、彼を愛している」という。この歌での完璧な妻のような愛人 Margie と、愛人のように誘惑的な性的魅力をもつが冷たい妻 Sally は、通常の妻と愛人の「理想の逆」である。この虚構の3角関係は、Buddy が悩んでいるにも関わらず、彼の気持ちに反する賑やかな速いテンポの音楽で演じられ、喜劇的效果を生んでいる。

ピーター・フォーブス (Peter Forbes)^[30] は *Mamma Mia!* や *Singin' in the Rain* などの West End 公演にも出演している俳優だが、笑わせる喜劇を演じダンスも見事に踊っていて、4人の中でも見応えある folly であった。

Folly の最後には、狂気のように求めた Ben に失恋して、“Losing My Mind” を歌い、心碎かれている傷心の Sally に、“Hey, kid, it's me” と優しい言葉をかける Buddy。Buddy はやはり Sally を愛しているのだ。Sally も Ben のことは妄想だったわと言う。

こうして folly の大騒ぎのなかで4人は真実を知る。Ben は自分の恋人ではないと Sally は認識し、自分の狂気は恋ではないと知り、夫の Buddy とパーティを去り自宅に向かう。

この舞台の最終場面は、若さを求める中年の危機において、成功に慢心した Ben が自分には愛がない、自分の人生には何もなかったことに気づく folly となっていた。Ben も自分の愚かさを認識し、Phyllis を求めて叫ぶ。彼の絶望に対し、「上着を着て、帰りましょう」と实际的な Phyllis は言う。この再演では Phyllis が、Ben を慰め一緒に生きていこうと連れて行く。Sally は夫に、Ben は妻にそれぞれ自分の非を認める。過去の姿を見ることにより、懐かしいどころか、思いもかけなかった真実を知り、衝撃を受ける4人。folly (虚構) を捨て、現実生きる。この *Follies* の再演は4人組のドラマをわずかな幸福へ向かう可能性に結び付けて終わる。

フォリーズは過去のものでもう存在しないのだと、全てが消えて、「華やかなショー folly は虚構

なのだ、非現実なのだ」という終わり方に、Sondheim ならずとも涙である。同窓会で、昔を思いだし昔のヒット・ソングを歌い踊る昔のフォリーズ・ガールズは、華やかなショウを観客に懐かしく思い出させ、青春の素晴らしさを感じさせる。過去を懐かしみ自分の歌を歌うものの、自分の現実を知ってしまう。ショウの楽しさを再現するが老齢を知るフォリーズ・ガールズと、過去を振り返った4人にとっての苦痛に満ちた自己認識という2つの明暗の物語が重なりあって、過去と現在の二元性が巧みに舞台化されていて感動した。この作品には筋がないと批判されるが、観客を演劇的に感動させる舞台を目指す Dominic Cooke の演出によって、過去のスターが演じるショウも、2組の夫婦が演じる心理劇も Sondheim の優れた歌詞と曲を生かして1幕の統合されたミュージカルに変身していた。演出の勝利である。

註

- [1] Dominic Cooke, CBE は1966年生まれのイギリスの演劇・TV・映画演出家で作家である。Olivier 賞を4度受賞し、BAFTA (英国映画テレビ芸術アカデミー) 賞候補にも。Stephen Daldry のもとで1995年にRoyal Court 劇場と関わりやがて芸術監督となり、2003年にRoyal Shakespeare Company に。2011年からNational Theatre 助監督。2007年 *The Crucible* でOlivier 賞初受賞。2016年、BBCTV の *The Hollow Crown: The Wars of the Roses* 中の *Henry VI Parts 1 and 2* の脚本共同執筆者。彼の演出舞台を見たのは初めてだが、*The Hollow Crown* (2017年日本で映画館上映) には感銘をうけた。
- [2] 本稿では、舞台作品 (*Follies*) とそのテキスト本文を *Follies* と記す。この舞台の中で行われる Ziegfeld *Follies* を模したショウをフォリーズと区別する。
- [3] Ziegfeld *Follies* は、1907年から始まり、Florenz Ziegfeld の死去により1931年で終了。死後最後の復活公演は1957年。しかしこの *Follies* の舞台では2つの大戦間の興行 (1918年から1941年まで) と設定され、1971年の同窓会の時も興行師ワイスマン氏が生きている。Ziegfeld は最初力自慢で肉体美の男性の見世物で興行を始め、元来寄席芸、つまり数々の芸や見世物をごった煮的に集めたショウ (vaudeville show) の興行師だった。パリの劇場Folies Bergere (フォーリー・ベルジェール) がやっていた観客を喜ばせる誘惑的なレビューを模倣して Ziegfeld *Follies* を興行し人気を得た。
- [4] Stephen Citron, *Sondheim & Lloyd-Webber: The New Musical* (The Great Songwriters series), Applause Theatre & Cinema Books, 2014.174. ©2001 (OUP)
- [5] Gloria May Josephine Swanson (1899-1983) は、アメリカ映画女優。サイレント映画時代からスターということを生かした1950年の映画『サンセット大通り』 (*Sunset Boulevard*) で有名。問題の still 写真は、この『サンセット大通り』の宣伝用写真。この映画の中で彼女演じる Norma Desmond が過去の栄光を忘れられず、過去に生き、まだ活躍中の大女優として虚構の中で演技することが、*Follies* のヒントになった。Citron によると、初演ポスターの図柄はこの *Follies* の主題を示し、過去の栄華を表す女神の頬に走るひび割れた筋が、過去と現在の対比的な意味を巧みに表している。(Cf. Citron, 175.)
- [6] The Folies Bergère は、1869年に開業したパリの娯楽劇場。始めオペレッタ、流行歌やアクロバットなどを含む軽い娯楽を提供した。1872年にフォーリー・ベルジェールという名称になり、賑やかなキャバレー音楽の伴奏で若い女達のレビューを見せて、1890年代のベル・エポックから1920年代までの時代に最盛期を迎えた。レビューは、裸に近い若い女達に薄物の衣装を着せ、派手な装置で舞台効果をあげ、大衆的な人気を得た。有名芸人も、その公演の看板スターとして短時間出演した。Folies Bergère を模倣したフォリーズ (*Follies* という米のショウ) は、folies ([仏] ばか騒ぎ) の派手なショウを再現させ観客を狂喜させた。だが、露出度の高い衣装の女性達への性的興味で客を集めるパリのレビューを模倣しながらも、それが仄め

かす性的誘惑を隠蔽するかのよう、Ziegfeld は娘達を美化し、アメリカ美女の華やかな見世物を売り出した。

[7] Vicky Mortimer は the Slade School を卒業後、2003 年 Royal Ballet の舞台美術家として登場し、以降 Royal Opera や Glyndebourne 音楽祭のオペラで活躍。RSC では『冬物語』など、Broadway では musical に、また West End でも多くの劇場で舞台美術に関わる。National Theatre には、*The Three Penny Opera*, 2016 装置賞、『銀杯』(*The Silver Tassie*, 2014) など 25 の舞台作品をデザイン。2018 年 *Follies* で Olivier 衣装デザイン賞受賞。

[8] “A Pretty Girl Is Like A Melody” は 1919 年に Irving Berlin (1888-1989) によって書かれ、the *Ziegfeld Follies* の主題歌になり、standard jazz になった。Irving Berlin は tin pan alley の歌作りで、国民に愛されアメリカ最高の song writer と呼ばれるが、hit した名作 musical は *Annie, Get Your Gun* (1946) くらいである。

[9] 舞台を辞めた Whitman の二人は、Astaire に似てダンス・スクールを経営している (有名な Arthur Murray dance studio)。Rusty E. Frank によると、1930 年代に若い Fred Astaire として人気で Ziegfeld Follies でタップを踊った Buddy Ebsen と妹 Vilma Ebsen [*Tap!*] がこのコミック・ダンスペアのモデルかもしれない。

Cf. Rusty E. Frank, *Tap! The Greatest Tap Dance Stars and Their Stories 1900-1955*, William Morrow & Co. Inc. NY. (c) 1990., p.180.

[10] パリのフォーリーに倣って始まり、アメリカにいながらにしてパリを味わえると人気だった歴史を思い起こさせる。また、Ziegfeld はポルトガル生まれフランス人歌手アナ・ヘルド (Anna Held) のフランス風性的魅力を派手に宣伝して Broadway で成功させた。彼女に勧められたパリのフォーリー模倣の Ziegfeld Follies 初期はパリ風、フランス賛美が目立った。

Cole Porter は 1917 年からパリの邸に住み、結婚し、華やかなパリ風の社交生活をおくった。1923 年ヴェネツィアにも邸宅を借り、客を楽しませるため曲を書いて演奏した。1928 年に Broadway で初演したミュージカル *Paris* 中の “Let’s Misbehave” や “Let’s Do It” といったパリ風性的暗示を仄めかず歌が初めてヒットした。戦争の気配に 1939 年パリを去りアメリカに戻った後も、パリ風の洒落た大人の歌を書き続けた。

[11] Hattie の歌には 42nd Street という歌詞も出てきて、Busby Berkeley 演出の映画 *42nd Street* (1933) で、題名歌を歌い、タップを踊ったルビー・キーラー (Ruby Keeler) を思いださせる。

[12] 1930 年生まれという年齢から言って Sondheim は現実に Ziegfeld follies 1918-1931 を見たはずはない。Ziegfeld Follies や Broadway で流行した歌曲やダンスを模倣し、この *Follies* の演目として創造したと思われる。

[13] Bill Deamer は 1920 - 1930 年代の tap dance を研究し再現する振付家で、2012 年 *Top Hat* で名声を得て、2013 年 Open Air Theatre で 1920 年代の dance を再現した *The Boy Friend* (1953) 再演も好評だった。Whitman 兄妹の演じるこの美しいダンス場面は Bill Deamer の振付のたまものと思う。

[14] この歌 “One More Kiss” は Dame の称号をもつオペラ歌手 Barstow ならではの、過去の栄華を表しウィーンの香り高い名唱。オペラ歌手 Heidi Schiller は、オペレッタに相応しいドイツ系名前から、ウィーンから来た多くの欧州音楽家の 1 人かも。この歌は常に Lucia Albanese (Lincoln Center 1985) などオペラ歌手が歌っている。ウィンナ・ワルツの模倣だが、20 世紀初頭のレハールではなく、Ziegfeld 制作で上演されたオペレッタ *The New Moon* (1928) の恋の歌 “One Kiss” も関連。Sigmund Romberg 作曲で Sondheim の恩師 Oscar Hammerstein II 作詞から。

Sigmund Romberg はハンガリー人で、ウィーンで勉強し 1909 年にアメリカに来た。始め pianist として働き、Shubert Brothers に劇場音楽を頼まれ、ウィンナ・オペレッタの翻案に成功。後、自身のオペレッタ *Student Prince* (1924), *The Desert Song* (1926), *The New Moon* (1928) などが成功した。*The New*

Moon は Broadway 舞台後、映画化 (1930 公開) され、オペラ歌手 Grace Moore が主役を歌った。

- [15] 前述の Sigmund Romberg よりも先に Victor Herbert がアメリカに来て、彼作曲のウィーン風オペレッタが、オペレッタの流行に先鞭をつけた。Herbert はアイルランド 1859 生だが、父の死後、母方の London へ、母の再婚で 8 歳でドイツへ赴き、音楽教育を受け、Stuttgart 音楽院卒業後は独奏者として名声。宮廷歌手のオペラ歌手と結婚し、1886 年二人で New York メトに就職した。NY に来てから作曲した *Fortune Teller* (1898), *The Red Mill* (1906), *Naughty Marietta* (1910), *Sweethearts* (1913) などのオペレッタで、一世を風靡した。

Charles Rudolf Friml (1879 生) は、少年時代から音楽の才を見せ、プラハ音楽院でピアノと作曲をドボルザークに学ぶ。有名ヴァイオリニストのピアノ伴奏者としてアメリカ演奏旅行に来て、アメリカ永住を決意。メトの稽古ピアノ奏者となり、1904 年カーネギーホールで pianist としてデビュー。Herbert が作曲するはずだったオペレッタ *Firefly* の作曲を依頼され、初演成功 (1912)。続いてオペレッタ風 musical, *Rose-Marie* (1924) を生み出し世界中で人気を得、*The Vagabond King* (1925) もヒットした。

- [16] 2017 年舞台では Dawn Hope (1960 生) が、ベテラン Adrian Grove (BBC Proms で *My Fair Lady* と *Rogers & Hammerstein* に出演) と共に、vaudevillian のペア Stella & Bill Deems を演じる。*Follies* の後、了後コミックな掛け合いの才能を生かして radio 番組に出演し、今は店を経営と語り、Astaire と踊った vaudevillian のペア、Gracie Allen & George Burns を思いださせる。

- [17] Michael Bennett (1943 - 1987) アメリカの musical 演出家、作家、振付家、ダンサー。Broadway のショウで 7 回 Tony 賞振付賞・演出賞で受賞。*Promises, Promises, Follies, Company* の振付家。*A Chorus Line* (1976) で振付賞と演出賞の両方受賞。*Dreamgirls* (1981) は演出し共同振付賞受賞。Bob Fosse と異なり、特異なスタイルの振付ではなく、彼の振付はむしろ、音楽形式や明確な人物像と結びつく。

- [18] Tracie Bennet (1961 生) イギリスの人気女優。*Mrs Henderson Presents* (映画邦題 『ヘンダソン夫人の贈り物』(2005 公開映画) の舞台 musical (2016) に主演。Mrs Henderson は実在の人物で、戦争中に少年のまだ若い兵隊が戦地に赴く前に、せめて若い女が女性的魅力をふりまく (ヌード) ショウを短時間でも見せてやりたいと戦中にレビューを続けた人物である。Tracie Bennet は、*She Loves Me* (1994 Olivier 助演女優賞)、*Les Misérables* (2006 Mme. Thénardiers 役)、*High Society* (Olivier 主演女優賞候補 2003)、*Hairspray* (Olivier 賞助演女優賞候補 [Velma])、演劇 *End of Rainbow* (Olivier 2010, Tony 2012 主演女優賞候補) という多数の受賞歴。

- [19] Ethel Merman (1888-1989) 歌声と歌唱の見事さで、伝説的な Broadway の女優。Merman は歌では常に舞台の華で作曲家のお気に入りだった。彼女の歌唱は、マイク無しの地声で澄んだトランペットのように劇場に響き渡り、それでいて滑らかで芳醇な葡萄酒のように艶やかな声、自動ピアノのように明確できれいな発音で観客を魅了した。しかしロマンズの主役を演じたのは、*Annie, Get Your Gun* の舞台 (1946) が初めてであった。

- [20] Citron, *ibid.*, 180.

- [21] Imelda Mary Philomena Bernadette Staunton, CBE は、1956 生まれのイギリスの舞台・映画女優。Sally が 1971 年の同窓会の日、49 歳というので、Staunton は実年齢より 10 歳以上若い女性を演じている。RADA 卒業後、1970 年代から英国の劇場で活躍を始めた。Olivier 賞主演女優賞を 4 度受賞、3 度は Sondheim 作で *Into the Woods* (1991), *Sweeney Todd* (2013), *Gypsy* (2016)。さらに演劇で *A Chorus of Disapproval* (1985)。BAFTA 賞主演女優賞、ベニス映画祭主演女優賞、アカデミー賞やエミー賞など数々の受賞や賞候補の経歴。なお、2019 年 1 月からの *Follies* 公演で、Staunton は Sally を降りる。次の Sally 役 Joanna Riding は、若くして National Theatre の *Carousel* (1992) で、Olivier 賞主演女優賞。以降も National Theatre 公演で *A Little Night Music* (1995)、有名な *Guys and Dolls* (1995)、*My Fair Lady* (2002) と活躍。当時は Eliza が Joana Riding と知らなかったが好演だった。2014 年に Shaftesbury Theatre で Richard Eyre 演出の *Pajama Game* の主演 Babe に感激。

- [22] Philip Quast (1957-) Australian 舞台俳優・musical 俳優。Laurence Olivier 賞 3 度受賞。Trevor Nunn の勤めで *Les Miserables* (1995) の Javert を演じ musical 俳優として有名に (10 周年記念 Cocert CD: Dream Cast in Concert)。Royal National Theatre で *Sunday in the Park with George* (1991) Olivier 主演男優賞。 *South Pacific* (2002), *Evita* (2007) Olivier 助演男優賞候補。経歴から、高音が美しく難曲を歌える歌手だと分かる。
- [23] たいまつをかかげるように暗い舞台の中一人照明をうけ、恋人に去られ、しかし恋人を忘れられない歌を歌うので、torch song と呼ばれる。torch song は黒人が何世代にもわたって馴染んでいる歌でゆったりしたブルースの歌。Helen Morgan (1900-1941) は *Show Boat* (1927) の “Bill” と “Can't Help Lovin' Dat Man” という 2 つの歌で、torch singer の典型となった。1931 年 Ziegfeld Follies に出演。Fanny Brice (1891-1951) の歌った torch song, “My Man” (1921) も伝説的。Ziegfeld の headliner だった (1910-11) Fanny Brice は、Ziegfeld Follies (1921) で “My Man” を歌った。 *Funny Girl* の舞台 musical 初演 (1964)、映画 *Funny Girl* (1968 公開)。
- [24] *National Theatre Live: Follies* 2018 年 10 月 20 日(土) TOHO シネマズ名古屋ベシティ
- [25] 初演では、バック・ダンサーは chorus boys. このダンスの曲と歌詞は Cole Porter のスタイルの模倣 (Citron, 180)。
- [26] Janie Dee (1962 生)。Olivier 賞他、様々な賞を受賞する有名イギリス女優。National Theatre 制作 Nicholas Hytner 演出・Kenneth MacMillan 振付の *Carousel* (1992) の Carrie 役 (comic な準主役) でスタートし、最近では 2013 年 Leicester で *Hello Dolly!* を演じ成功させた (UK Theatre Awards)。この経歴からみて comic な dance が巧いのは当然。この地域劇場賞では、Imelda Staunton が前年の 2012 年 *Sweeney Todd*, Chichester 公演で受賞していて、ほぼ Staunton に似た華麗な経歴。他に 2013 Sondheim Revue *Putting it Together* (Guildford, 2014; St James Theatre, 2015), *A Little Night Music* (Desiree Armfeldt 役) Gala Concert Palace Theatre, 1986 に出演。 *Cabaret* の主役 US で振付家 Bill Deamer に認められ Alan Ayckbourne の劇に。以降、演劇作品でも各賞受賞し、Ayckbourne の演劇 *Woman in Mind* で Olivier 主演女優賞、2009)。Phyllis のほうが Sally より主役という公演もあり。
- [27] Zizi Strallen (1990 London 生) 新進女優で Sondheim の *Merrily We Roll Along* (2013) に出演。姉 Scarlett Strallen が 2004 年初演で演じた *Mary Poppins* の主役を国内巡業で演じていて、それが 2018 年 9 月 *Alladin* 終了と共に Prince Edward Theatre で再演される。Charles Stemp (Barton 役 *Half a Six Pence* 2016-7) と共演する。
- [28] 2017 年の London 公演の program では、“Buddy's Blues” と記されるが、初演版では、この歌の重要な繰り返しフレーズ、“The- God- Why- Don't- You- Love- Me- Blues?” が題名となっている。Blues は米国南部 (deep south) で 1870 年頃、黒人霊歌から発生し、黒人綿花労働者達に過酷な労働を紛らわすため歌われていて、黒人生活の労苦、災難、惨めさ、悲痛な心情を歌う。
- [29] derby hat 1940 年代人気の Bud Abbott and Lou Costello の喜劇コンビがこの derby hat を被る。実は Charlie Chapin 以来喜劇俳優が愛用する bowler hat (英語) である (derby hat は米語)。派手な上着と幅広のズボンも 1940 年代の流行。
- [30] Peter Forbes (1952, Scotland 生) Edinburgh 大英文科卒業後 Bristol Old Vic School で学ぶ。Shakespeare や演劇を演じた TV 俳優としても長い経歴。学生演劇で musical *Oliver!* 出演がきっかけで、演劇を目指す。Open Air Theatre, Regent Park 公演では 1 season 中、Shakespeare 劇と musical を劇団員全体で交互に演じる system を経験した。演劇学校出身のイギリス俳優が難なく musical を演じ、しかもダンスや歌もうまいのに驚く。演劇学校で両方学ぶことになっているのが羨ましい。

(玉崎 記)

・ 2018 年夏 ロンドン (& ストラットフォード・アボン・エイボン) 演劇事情

今年の夏は、それぞれ短い滞在であったが、3度イギリスを訪問した。ロンドンとストラットフォード・アボン・エイボンで、Shakespeare 劇を中心に以下 13 の公演を観ることができた。

- 5/4 *Macbeth* (National Theatre)
- 5/5 *As You Like It* (Shakespeare's Globe Theatre)
- 6/30 *La Boheme* (Covent Garden Royal Opera House)
- 7/1 *Hamlet* (Shakespeare's Globe Theatre)
- 7/6 *Macbeth* (Stratford-upon-Avon Shakespeare Theatre)
- 7/7 *The Duchess of Malfi* (Stratford-upon-Avon Swan Theatre)
- 7/7 *Romeo and Juliet* (Stratford-upon-Avon Shakespeare Theatre)
- 8/7 *Goodnight, Mr. Tom* (Southwark Playhouse)
- 8/14 *King and I* (the London Palladium)
- 8/16 *King Lear* (Duke of York's Theatre)
- 8/17 *Winter's Tale* (Shakespeare's Globe Theatre)
- 8/18 *Emilia* (Shakespeare's Globe Theatre)
- 8/20 *Othello* (Shakespeare's Globe Theatre)

本稿では、以上 13 の公演の内、 のオペラを除く、12 の公演を 3 つのグループに分けて論じてみたい。一つ目は今夏もっとも注目された Shakespeare's Globe Theatre での公演 ()、二つ目は Shakespeare's Globe Theatre 以外のロンドンでの公演 ()、そして三つ目は Stratford-upon-Avon での Royal Shakespeare Company による公演 () である。

Shakespeare's Globe Theatre での公演が注目されたのは、これまで 2 シーズンに亘って芸術監督を務めてきた Emma Rice が劇場の運営委員会と対立して 4 月に辞任し、女優としてこの劇場の舞台にも立ち、最近ロンドンをはじめ各地で演出を手掛けている Michell Terry が新たに芸術監督に就任したからである。彼女は就任以前から、この劇場で上演するすべての劇で、男優と女優をフィフティ・フィフティの割合で起用するという方針を明らかにしていたが、不評だった Rice に代わってどのような舞台を見せてくれるか期待は高まっていた。

As You Like It と *Hamlet* はダブル・ビルで上演され、12 人の同じ役者たちが両方の劇に登場する。演出は Federay Holmes と Elle White の二人。いずれも経験の浅い女性演出家である。Terry は *Time Out* 誌で、今回の劇団は 'gender-blind, race-blind, disability-blind' 劇団だと語っているが、*As You Like It* では、Rosalind を長身の男優、Orlando を小柄な女優が演じ、Celia の父親 Duke Frederick も女優、Adam は Michell Terry 本人が演じた。ほかの役柄でも、Phoebe を男優

が、Audrey を女優が演じて、いかにも ‘gender-blind’ の方針が貫かれている。衝撃的だったのは Celia を演じた女優 Nadia Nadarajah である。彼女はインド人系の聾啞の役者である。台詞を語れないので、代わりに手話 (BSL) を用いていた。これが Terry のいう ‘race-blind’ ‘disability-blind’ である。Nadarajah の澀刺とした演技は他の役者を圧倒するほど素晴らしかったし、手話で Rosalind と語り合う時には、二人の間の深い信頼感が感じ取れたものの、手話を理解できない観客には Celia の本意が伝わらない。何故 Rosalind を男優が演じなければならないのか。何故 Orlando を女優が演じなければならないのか。しかも二人の役者の身長差があまりに大きく、かえってそのことばかりに気が向いてしまう。女性である Rosalind を男優が演じ、劇の途中で男性である Ganymede に変装するとき、Rosalind 役の男優は本来の男性として舞台上に立ち、男性である Orlando を演じる女優に、Rosalind への愛を告白させる。Terry はこの混乱ぶりを観客に楽しませようとしているのか。何故台詞を語れない役者に Celia を演じさせたのか。次から次へと疑問が生じてきて、純粋に劇を楽しむことができない。もっとも Shakespeare の時代には女優がおらず、少年役者が女役を演じていて、恐らく何の疑問もわかかなかったのであろうから、一旦、‘gender-free’ を容認してしまえば、男優が女性役を演じ、女優が男性役を演じて、何の問題にもならないのかもしれない。

Hamlet でも、Michell Terry 本人が演じた Hamlet をはじめ、Laertes、Horatio、Guildenstern (演じたのは *As You Like It* で Celia を演じた Nadarajah)、Marcellus を女優が演じ、Ophelia は男優が演じた。役柄と役者の性が同じだったのは、Claudius、Polonius、Fortinbras、Gertrude であった。1899 年フランス人女優 Serah Bernhardt を嚆矢として、1920 年のデンマーク人女優 Asta Nielsen、イギリスでは、1979 年の Frances de la Tour、1992 年の Ruth Mitchell、2014 年の Maxine Peake など女優が Hamlet を演じたことは何回もあるのですが、Terry が Hamlet を演じたことに違和感はない。しかも Terry は全体的には暗いイメージの Hamlet を上手に演じていた。しかしこれまでの女優版 *Hamlet* では Hamlet だけが女優に演じられたのに対して、この *Hamlet* では事情が異なる。何故 Ophelia を男優が演じるのか。何故 Laertes を女優が演じるのか。Ophelia を女優に演じさせ、Laertes を男優に演じさせればよいではないか。わざわざそうすることで作品にこれまでにない新しい解釈が与えられるなら、それはそれでよいのだが、この上演に新しい解釈を感じ取ることができなかった。作品に新しい光を当てるよりも、‘gender-free’ という方針が前提としてあると思えてならない。

今回は、大部以前にチケットを予約したので、すっかり忘れてしまって、*As You Like It* のチケットをダブルブッキングしてしまった。Shakespeare's Globe へ来たことがないという長年の友人であるイギリス人女性と彼女の娘にプレゼントした。あとで感想を聞いたところ、とても楽しかったという。‘gender-free’ など全く気にせず、ただただこの上演を楽しんだようだ。観客を巻き込んで劇の世界を楽しませてくれるのが Shakespeare's Globe の真骨頂であり、彼女たちのように虚心に劇を楽しむのが本来 Shakespeare が狙ったことだったのではないかと改めて感じた。

The Winter's Tale も女性演出家 Blanche McIntyre による上演である。役者は 13 人。内 5 人が男優である。男性役の二人の羊飼いと Autolycus が女優によって演じられた他はすべて役柄と役者の

性は一致していた。その意味では、上記の2作品と違って、落ち着いて観られるはずであったが、羊飼いと Autolycus が活躍するボヘミアでの場面が全く精彩を欠いていて、楽しめなかった。この作品の要の一つは閉鎖的で暗いシシリアと開放的で明るいボヘミアの対比にあると思うが、それが全く感じられず、平板な舞台になっていた。それにしても最後 Hermione が蘇る場面は何度観ても感動する。Hermione が実は死んでいなかったことを知っていてもやはり感動する。Hermione が死んでいなかったことを果たしてどれ位の観客が知っているのだろうか。知っていても知らなくても同じように観客を感動させるこの場面は Shakespeare の力技であると思う。

今夏、Shakespeare's Globe Theatre のハイライトは Morgan Lloyd Malcolm の新作 *Emilia* の上演であろう。Emilia とは、Shakespeare と同じ時代に生き、Shakespeare に作品のインスピレーションを与えたと言われる 'The Dark Lady' と目され、イギリス最初の女性による詩集を出版したことで知られる女性詩人、教育家、フェミニスト、Emilia Bassano Lanier のことである。Malcolm は Terry 本人からこの Emilia を主人公にした作品の制作を依頼されたという。これまで Malcolm の作品 *Belongings* (2011), *The Wasp* (2015) はいずれも Hampstead Theatre で上演され、好評を博していた。Emilia は 1569 年生まれ、父親は宮廷音楽家であった。両親の死後、Emilia は Elizabeth 女王の従弟にあたる Henry Carey の愛人となり、その後、宮廷音楽家の Alfonso Lanier と結婚。1611 年に詩集 *Salve Deus Rex Judaeorum* を出版する。1613 年に Alfonso が亡くなると、学校を経営するようになる。詩集の序文に「有徳の読者に」と題した一文があり、その中で、「男どもは、自分たちが女性の腹から生まれ、女性に養育されたことを忘れ、……自分たちが育てられた子宮を、蛇蝎の如くに、忌み嫌う」と述べていることから分かるように、詩集全体が男性中心社会への異議申し立てになっている。彼女がフェミニストと言われる所以である。この Emilia を主人公にしたこの劇もまた、彼女の人生を通しての、男性中心社会への強烈な異議申し立てである。演出は女性演出家 Nicole Charles。役者は全員女性で、Henry Carey、Alfonso Lanier、Shakespeare も登場人物の中にいるが、女優によって演じられる。秀逸だったのは主人公 Emilia を彼女の年代ごとに 3 人で演じたことである。youngest Emilia を Leah Harvey、middle Emilia を Vinette Robinson、oldest Emilia を Clare Perkins が演じ、3 人とも熱演であった。この 3 人が常に舞台にいて、oldest Emilia は劇の進行役を務めると同時に、youngest Emilia と middle Emilia の行動（つまり自分の若いころの行動）を見ながら、自己を批評する。逆に、youngest Emilia は、若いころの自分の目から、middle Emilia と oldest Emilia の行動（つまり自分の将来の行動）を見ながら、自己を批評する。こうすることで Emilia の人物像に厚みが出ていた。この作品では Emilia は Shakespeare の Dark Lady と指定されているので、3 人とも肌の色の黒い黒人女優によって演じられた。Dark Lady は Shakespeare にインスピレーションを与えたことになっているので、劇中に Shakespeare のいろいろな作品からの台詞が引用されていて、楽しい。Shakespeare 自身も登場するが、彼の反フェミニズム的な言動故に Emilia に拒絶される。全体的にはフェミニズムのプロパガンダ劇と観ることができる。今更フェミニズムのプロパガンダ劇でもなかりうとも思ったが、現在でも、Terry や Malcolm がこの劇を上演しなければならないと考えたほどに、女性が男性中心社会の中で抑圧され

て生きているのだ。劇の最後、oldest Emilia の長広舌のフェミニスト宣言を語り終わると、劇場中に歓声と拍手が轟き渡った。

Shakespeare's Globe Theatre で観た最後の劇は *Othello* である。Mark Rylance が Iago を演じるというので期待して劇場へ向かった。演出は Rylance の妻でもある Claire van Kampen。今夏 Shakespeare's Globe Theatre で観た 5 作品すべてが女性演出家による演出ということになる。1988 年 Royal Shakespeare Company での Hamlet 以来、Rylance の舞台は何度も観てきたが、彼はやはり喜劇にうってつけの役者だと思う。彼の演じる Iago にはコミカルな一面があって、Iago の「悪」が描き切れていなかった。Desdemona のハンカチを手に入れる場面も軽々しくて、運命を左右する重大な契機になる出来事とは思えない。妻の Emilia がハンカチは自分が拾って夫の Iago に渡したのだと *Othello* に告白すれば（そのチャンスは間違いなく何度もある）、この悲劇そのものが起きなかったのにと、今まで考えたこともない感想を持ったのも、この軽々しさゆえであったかもしれない。期待が大きかっただけに不満の残る舞台であった。

全体的には、今夏の Shakespeare's Globe Theatre は新しい芸術監督の標榜する方針を具現する方向で動いているが、評価は二分されているようだ。新しい試みを高く評価し今後の展開に期待する側と、その新しさに戸惑いを覚えて、「Emma Rice を呼び戻せ」とまで言い始める側とが拮抗する。Shakespeare 劇の登場人物は圧倒的に男性が多い。従って男優と女優をフィフティ・フィフティで採用するとなると、当然女優が男役を演じることになる。ところが Terry は、たとえば Rosalind や Ophelia のように、男優に女役を演じさせることもある。そこには何らかの意図があるはずと思われるが、それがほとんど伝わってこない。あるのは、ほぼ同じ数の男優・女優を舞台に乗せるという方針だけのような気もする。このままこの方針を続けていくとどうなるか。この時代にふさわしい Shakespeare 劇を発信することができるか、それとも単なる物珍しさに終わってしまうか。今後 Terry がこの劇場をどういう方向へ持っていか注視したい。この劇場でボランティアとしても働いているイギリス人の友人の劇作家からの情報によると、劇場の経営が思わしくなく、劇場に隣接している Shakespeare Museum が近く閉鎖されるという。

ロンドンでは他に 4 作品を観た。

まず National Theatre の *Macbeth*。演出は 2015 年 3 月に Nicholas Hytner の後を継いで NT の芸術監督に就任した Rufus Norris が担当した。Norris が NT で最初に演出を手掛けたのは *Everyman* で、中世の道徳劇を見事に現代に蘇らせ、その手腕が高く評価された。その後 2016 年に Brecht の *The Threepenny Opera* を演出し、その時 Macheath 役に登用したのが、今回 *Macbeth* を演じた Rory Kinnear であった。Kinnear は 2010 年に Hamlet を演じて Evening Standard 最優秀男優賞を受賞し、さらに 2013 年には NT の *Othello* で Iago を演じ 2 度目の Evening Standard 最優秀男優賞と Laurence Olivier Award 最優秀男優賞を同時受賞して、Shakespeare 役者としての地位を確立した。Norris にとっては今回の *Macbeth* が初めての Shakespeare 劇の演出である。Lady Macbeth を演じたのは TV 番組 *Shameless* に出演してイギリス人にはよく知られている

Anne-Marie Duff である。彼女は 2013 年に Broadway の Lincoln Center で Lady Macbeth を演じたことがあり、今回が 2 回目である。Shakespeare's Globe Theatre ほど女優は多くはないが、それでも兵士などの役を女優が演じていた。NT でも女性の進出が窺える。木立の中に城の一室が設定されている。城内というより山小屋といった雰囲気である。舞台左後方から中央前方に坂のように橋が下っている。その橋の上に大きな木が 3 本立っていて、木の枝には常に 3 人の魔女が佇んでいる。この劇が、常に魔女たちが観ている中、彼女らの魔力の中で、展開していくことが暗示される。魔女たちは劇が終わると、木から降り、橋を渡って、舞台から去っていく。橋だけによって他の世界とつながっているこの隔離された土地で、孤独な Macbeth の死への道行が演じられる。Macbeth の世界だけを描こうとしたためか、イングランドへ逃れた Duncan の息子 Malcolm が拳兵するよう進言に来た Macduff の忠誠心を試すイングランドの場面はすべてカットされていた。照明も抑え、終始暗い *Macbeth* であった。衝撃的だったのは Lady Macbeth が命を絶つ場面である。テキストでは夫人の死は部下によって台詞で Macbeth に伝えられるのだが、Norris の演出では、小屋の中で Lady Macbeth は銃で己を撃ち、銃声とともに、小屋の壁に鮮血が飛び散る。自害した夫人を Macbeth は膝に抱えながら、有名な “Tomorrow, Tomorrow.....” の台詞を語る。Macbeth が殺害された時、舞台には、これまで Macbeth によって殺された人々が亡霊のように登場し、Macbeth の死を見届ける。

Southwark Playhouse で *Goodnight, Mr. Tom* を観た。Michelle Magorian の少年少女向け小説を、イギリスにおける子供向け劇の第一人者 David Wood が劇化した作品である。これまでにミュージカルにも映画にもなっている。この劇場は地域の演劇活動を支えていて、地域の人々が楽しむだけでなく、自ら演じる機会を提供している。劇場が 2 つあり、客席 100 人ほどの小劇場で上演された。23 歳以下の若者に舞台芸術の機会を与えようと設立された The British Theatre Academy で演劇活動に携わっている主として若者たちによる上演である。演出は Jo Kirkland。第 2 次世界大戦が始まるとイギリスの都会の子供たちは地方の町や村に集団疎開をしたが、Deptford に住む Willie Beech もその一人である。彼は一人暮らしの偏屈な老人 Tom Oakley に預けられるが、二人ともなかなか心を開かず、ぎこちない生活が続く。Tom は Willie の背中への傷跡をみて、Willie が母親から虐待を受けていたこと知り、少しずつ心を開いていく。Willie も Tom に心を開き始める。Willie には Zack というユダヤ人の親友ができる。それを嫌った母親が Willie を引き取りに来る。この母親のもとでは Willie が幸せになれないと思った Tom は Willie を取り戻して、再び二人の生活が始まる。そのうちロンドンに戻った Zack が空襲で死亡したという報が届く。Willie は立ち上がれないほど悲嘆にくれるが、Zack が Willie に残してくれた自転車に乗れるようになることで自分を取り戻していく。いわゆる若者の成長物語である。最後の展開は原作と異なるが、劇はここで終わる。Tom 役の役者が若すぎたり、演技を習いたての子供たちのパフォーマンスに不満を感じたりしたが、そんなことよりも、こうした活動がイギリスの演劇文化を支えていることに感動を覚えた。イギリスの子役の中には大人の俳優顔負けの演技力を持っているものがある。*Billy Elliot* や *Matilda* など子役を中心としたミュージカルの大成功で、役者を目指す子供が多いと聞く。この公演でもいい役者になるだろうと

期待を抱かされた子役がいた。Zach を演じた Felix Hepburn である。いつの日か大劇場の舞台を踏んでいるかもしれない。

日本人俳優渡辺謙が *King and I* に出ていると聞いて、London Palladium へ出かけた。アメリカ人演出家 Bartlett Sher は 2015 年 Broadway の Lincoln Center でこの作品を演出し、今年ロンドンへ持ってきた。渡辺謙は大活躍であったが、観客の関心はやはり主演 Anna 役の Kelli O'Hara にあったようだ。*The Sound of Music* を想いながら観ていたが、何かが違う。それはこの作品 *King and I* が 'I' の眼を通してしか描かれていないためであろう。ところどころで東洋文化に対する西洋文化の優越感が垣間見えて、最後まで楽しめなかった。渡辺謙だけでなく、Siam の高官役で大沢たかおも出演していた。この作品は 2019 年の夏に日本で引越し公演が行われる。

この夏、最も観たいと思っていたのは、Duke of York's で上演された *King Lear* である。今年 79 歳になる Ian McKellen が *Lear* を演じるという。しかも彼が Shakespeare 作品の大役を演じるのはこれが最後になるであろうと噂されている。観ずに済ますわけにはいかない。演出は Jonathan Munby で、Chichester festival Theatre での上演のあと、Westend に移された。舞台は赤いじゅうたんを敷いた丸舞台で、舞台中央からストール席を通して場内最後列の「楽屋」まで花道が設けられている。1030 年代の服装で演じられ、一幕では *Lear* をはじめ男たちはみな軍服姿で登場する。頑な威厳をもって国を分割する *Lear*、*Cordelia* の言葉に怒り狂う *Lear*、荒野に追いやられ天井から降り注ぐ雨に全身びしょびしょになりながらも湧き上がる狂気を押さえつけようと苦闘する *Lear*、狂気から覚め *Cordelia* の前に跪く *Lear*、最後、*Cordelia* のよみがえりを信じ、歓喜のうちに息絶える *Lear* を McKellen は見事に演じきった。これまで何度も観た *King Lear* の中でも筆頭に挙げて良いと思えるほど素晴らしい出来栄であった。それも McKellen の演技によるところが大きい。上演が終わって外に出ると、黒山の人が道路にあふれていた。楽屋から出てくる McKellen をねぎらうためのファンたちであった。普段はやったことがないのだが、多くの人に混じって McKellen を待った。待つこと 1 時間ほどで McKellen が楽屋口から姿を現した。拍手に迎えられながら McKellen は多くのファンと言葉を交わし、サインに応じていた。舞台で見るより小柄で、一人ひとりのファンに対応する姿からは誠実な人柄が窺えた。*King Lear* を観るときいつも気になるのは道化をいかに退場させるかである。テキストではいつの間にか舞台上に登場しなくなるのだが、どの演出家もそれぞれの方法で道化を退場させる。*Lear* が嵐の場面を経て、自分の置かれた現実を理解し始めるようになると、道化はもはや私の役目は終わったというような表情を観客に見せて舞台を去り、それ以降登場しないという演出、荒野の場面で *Lear* が誤って道化を撲殺してしまうという演出、などなどこれまでもいろいろな演出が試みられた。今回は *Lear* を匿まった罪で Gloucester が眼をくりぬかれる現場で、身を隠していた道化が Gloucester の息子 Edmund に見つかり、殺害されてしまうという演出であった。今回、迂闊にも初めて思い知らされたことがあった。一幕一場で、*Lear* が国土を分割しようとするとき、*Cordelia* の求婚者、フランス王と Burgundy 公爵とを Gloucester に呼びに行かせる。Gloucester が席をはずしている間に、*Lear* の逆鱗に触れ *Cordelia* は勘当される。国王、侯爵を連れ

て戻ってきた Gloucester はいない間に起こったことを当事者のやり取りを通して、知ることとなる。今回の演出では、ことの成り行きを知った Gloucester をひどく狼狽させる演出を取った。狼狽する Gloucester を見て、そうだ、彼は Cordelia が Lear の怒りを買い勘当されたことを全く知らなかったのだと初めて気が付いた。もう一つ、今回の演出の目玉は、Kent 役に女優を採用したことだ。ただし、Shakespeare's Globe Theatre のように、女優が男役を演じるのではなく、Earl of Kent を Countess of Kent に変更し、女優に女性役を演じさせていた。狙いは良くわからないが、Shakespeare's Globe Theatre の狙いとは異なるものだ。これについては、Shakespeare's Globe Theatre の今後の動向を見ながら、稿を改めて考察してみたい。

Stratford-upon-Avon では Royal Shakespeare Company の公演を 3 つ観ることができた。

最初に観たのは *Macbeth* で、演出は Polly Findlay。Macbeth を演じた Christopher Eccleston は RSC 初登場である。開演前から舞台上に 2 人の人間が蹲り、じっと動かずにいる。やがて開幕間際になると、起き上がって、舞台隅に置いてあるウォーターサーバーから水を飲み、その後は常に舞台隅の椅子に腰かけ、舞台を見ている。やがて、「門番の場」になると、やおら立ち上がって、門番を演じる。門番の視点から Macbeth という劇が展開しているかのような構造になっている。面白かったのは、舞台上にデジタルの時刻表示があって、Duncan 王殺害の時から Macbeth が死ぬまで間、2 時間の表示が 1 分ずつ減って行って、最後に残り時間がなくなると同時に Macbeth が殺害されるという演出である。Macbeth が時間に憑りつかれていたことを暗示しているのであろう。魔女は 3 人の子供たちによって演じられたが、その澄んだ声がひどく印象に残った。まるで Macbeth についての講義を受けているようだの批評があったが、やや演出が過剰のように感じた。

演出が過剰といえば、次に観た John Webster の *The Duchess of Malfi* にも同じことが言える。演出は、RSC で 2012 年に *King John*、2013 年に *As You Like It*、2014 年に同じ Webster の *The White Devil*、2016 年に *Doctor Faustus* を演出して、それぞれ注目され、今では RSC になくはない存在の Maria Aberg である。どの作品も彼女の考える「リアリズム」に基づいて演出され、舞台はいずれも現代に置き換えられる。テキストに多くの変更が加えられていて、初めてこの劇を観劇する人には人物関係がわかりにくいのではないかと思われた。舞台上左手に、両手を切り落とされ両足を縛られた大きな人形が逆さ吊りされている。女性とも見えるし、大きな動物のようにも見える。劇前半が終わって休憩時間になると、劇場の係員が最前列の観客に毛布を配った。後半が始まると、登場した Ferdinand が人形のおそらくは子宮と思われる箇所短剣を刺す。大量の血が流れ出て、舞台の半分が血糊で埋まり、血が観客席まで飛び散る。その後、劇が終わるまで、役者は全員が血糊に足を取られながら、全身を真っ赤にして演技をする。公爵夫人も血の海の中で扼殺される。テキストでは、Bosola が誤って公爵夫人の夫 Antonio を殺害してしまうのは「霧の中」なのだが、この舞台では、「血の海の中」である。舞台全体から伝わってくるのは男性社会に対する演出家の告発だが、何故このような過剰な演出をするのかわからなかった。

最後に観たのは *Romeo and Juliet* である。演出は女性演出家の Erica Whyman。ヴェローナの

公爵 Escalus や Mercutio など 5 人の男性役に女優が割り振られ、それぞれ男性役として演じていた。Romeo の親友である Mercutio に女優を配したことには特に違和感を感じた。2メートルほどの高さの直方体で 4 つの側面のうち 2 面が壁で 2 面が開放されている装置が舞台に置かれ、それを移動することで、ヴェローナの街角を現したり、墓地を現したりしていた。バルコニーのシーンでは Juliet がその装置の上において、舞台上の Romeo と愛を語る。この装置を使うことで 2 時間 20 分という迅速な劇の展開を実現した。劇の最後に、死んだ Tivolt が舞台に登場するという、これまで見たことのない演出が取られたが、その他には画期となるような演出は見当たらなかった。

RSC で観た 3 作品はすべて女性演出家による演出であった。実は、芸術総監督の Gregory Doran は、この 3 作品だけでなく、2018 年夏シーズンのすべての上演作品に女性演出家を採用した。RSC 始まって以来初の出来事である。前述の通り、Shakespeare's Globe Theatre でも女性演出家だけでなく、女優の活躍が顕著であった。今夏のイギリス演劇界は女性活躍のシーズンであった。今後この動きがどのようになっていくか注視したい。 (酒井 記)